

【ヒデじいの歴史探偵ガイド話】Facebook からの原稿

1, はじめに

2022年3月23日に実施したボランティアガイド協会の研修部会で、私が講師を務めた研究座学講座テーマは「近江の古代豪族に想いを巡らす」です。これについては、レジメ等は会員に電子メールで送りましたが、実施するまでの間に、予習がてら、Facebook に投稿した原稿を改めて、整理したものです。以下に掲載します。 【西川秀夫】

3月23日午後2時頃(白雲館内2階)からと私の座学講座の日程がやっと決まった。でも45分でやってくれ!と念押しされた。(ひえ、殺生な😱)テーマから古代近江豪族「和邇氏」は外せない!! だけど伊勢遺跡等の絡みで近江の狗奴説や、大国主命、ニギハヤヒ(古事記、日本書紀には書かれていない瀬織津姫を妻としたとも)、天目一箇神(大年神の子)、応神天皇(=八幡神)などの神々の関係をも語らねばと思っている。あまりにも時間が無さすぎます! せめて織田信長の時代か八幡商人までもいけたらいいな!?!? と思っている。写真は和邇浜(比良)と和邇氏の本拠地とされた大津の春日山古墳群です。何故、和邇なのに春日山なのか? 理由は講座でお話しします👉コロナで中止になるかもしれませんが……? ついては、今後はシリーズ物の独語を投稿していきたいと思うので、会員の方は予習と思って読んでいただくようお願いいたします❤️・・・*なおFacebook本文には投稿の際は写真画像を添付していますが、ここには貼り付けておりません。見たい人はFacebookを見てください。

……ということで、今回、ここに私の講座のレジメを掲載する。さらに2, 以下は講座に関しての「近江八幡観光ボランティアガイド協会」というFacebookでのグループを作っており、その中で、私が補完した「つぶやき=投稿」をまとめて掲載したものです。あくまでも補完稿としてお読みください。では…

近江八幡観光ボランティアガイド協会 研修部 座学講座 レジメ

「近江の古代豪族に想いを巡らす」

研修部員 西川秀夫

1, 日牟礼八幡宮について

① 日群之社 …… 応神天皇6年(275)に応神天皇が近江行幸の際、御座所を設けて休憩された。その仮屋跡に 日輪の形を2つ見るという現象があり、祠を建て「日群之社」とした。…この現象を「幻日」と云うそうです。

② 比牟礼社 …… 持統天皇5年(691)、藤原不比等が参拝して歌を詠んでいる。その和歌にちなんで、「比牟礼社」に改めたと伝わる。

③ 比牟礼と八幡宮の習合 …… 991年、一条天皇の勅願により、宇佐八幡宮を八幡山の山頂に勧請して八幡宮を祀った。…現在の下社は遥拝社(1005年)であった。

*疑問1: 藤原不比等の万葉和歌にある「八幡」は何なのか? 300年の差がある。

「天降り^{あまふり}の 神^{かみ}の 誕生^{みあれ}の八幡^{はちまん}かも ひむれ^{もり}の柱^{しらくも}に なびく白雲」

④ 和邇^{わに}氏・日触^{ひふれ}使主^{のおみ} という江州土着の豪族 …… 「日触」(ひふれ)が転じたとする説もある。

日触使主（ひふれのおみ）

名前：日触使主（ひふれのおみ）【日本書紀】

丸邇之比布禮能意富美（わにのひふれのおほみ）【古事記】

応神天皇が近江行幸のとき、（日本書紀：応神天皇 2 年 3 月壬子の条）

娘：宮主宅媛（みやぬしやかひめ）【日本書紀】、

宮主矢河枝比売（みやぬしやかえひめ）【古事記】

を見染めて后とした。

結婚して生まれた御子が「宇遲能和紀郎子」（うじのわきいらつこ）【古事記】

=菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）【日本書紀】である。

応神天皇の皇太子となったが、兄の大鷦鷯尊（おほさざきのみこと）【日本書紀】、大雀命（おほさざきのみこと）【古事記】と、・・・後の仁徳天皇と皇位を 3 年間争い敗死する。→宇治天皇と書かれている書物（播磨国風土記）もある。・・・和邇氏と葛城氏の政争とも云われる。「山城国風土記」には：「もとは許乃國（木の国）というが菟道稚郎子の宮があったので宇治となずけた」と記している。

宇治神社・宇治上神社の二座に祀られている。宇治の平等院の川向の東側に神社あり

「菟道」とは「兎の通る道」である。和邇氏とは「ワニざめ」のことである。

「素兎」と「ワニ」で思い至る 神話は？ その舞台は？・兎神（白兎神社）=ツクミの化身とも・・・
・兎は「宇佐（菟狭族）」か？（推理）出雲族・大国主神との関係は？八上比売（最初の妃）の求婚の予言

・一説には、秦氏という学説もあるが、一方では近江の息長氏（又は安曇氏）と和邇氏の勢力争いに見える方もある。蒲の穂は蒲生野に通じるから。→ 近江高天原説という学説もある。（紹介のみ）：天御中主命，多賀大社、倭国大乱。

王仁博士（和邇吉師）：菟道稚郎子の師匠・・・千字文・論語などをもって百済から来朝。

⑤ 応神天皇の近江行幸・・・八幡（松明）祭の起源か？・・・神社由緒書：南津田に上陸？

⑥ 日牟礼八幡宮の神職は元は和邇氏の系統の 櫛井（市井・一井）氏 → 目賀田氏 → 岳？

⑦ 祭神について

主祭神：誉田別尊、息長足姫尊、比売神（宗像三女神）

境内社：天照大神・豊受大神（常盤社）、天宇受売命（宮比社）、大国主命（大嶋社）

宇加之御魂神（稻荷社）、建速須佐雄命・少彦名命（八坂社）、事代主命（恵比寿社）・・・他に岩戸神社、愛宕神社などがある。

⑧ 琵琶湖 霊ラインをつなぐ 神々の話

若狭（籠神社=元伊勢）→白鬚神社（猿田彦命）→ 沖島（厳島神社=宗像三女神）→ 大島奥津嶋神社（大国主命・奥津嶋姫=宗像三女神）→ 日牟礼八幡宮（比売神=宗像三女神）→ 伊勢（天照大神、豊受大神、猿田彦命）（・・・元伊勢があれば元出雲もある。）

* 宗像三女神はスサノオとアマテラスの誓約（うけい）で生まれた神=海族のシンボル（宗像・住吉）

* 「宗像の子は住吉で、住吉の子は宇佐である。」という言葉から海洋民が連想される。

綿津見三神、宗像三女神、住吉三神は海の神（航海神）である。すべてオリオン座の三連星だとされ、三位一体で航海の目印だった。和邇の春日氏と春日大社・藤原氏とも関りがあつた。

* 大嶋奥津島神社の境内社に「日触社」がある。元大嶋神社は日牟礼八幡宮の場所にあったと伝わる。・・・

だいたいこの辺りは大嶋郷であったのだから。・・・八幡大菩薩の意味は（神仏習合）

2、近江の古代和邇（和珥・丸邇）氏と安曇（阿曇）氏について

どちらも古代の海洋民である。ともに九州地方を本拠地にしていた。

安曇氏・・・安曇川、安土（アドの地）、遠くは、長野の安曇野、・・・籠神社＝海部氏＝安曇系

奴の国＝志賀島（金印）が本拠地＝志賀 → 滋賀 となった。海部氏と忌部氏は近い関係

和邇氏・・・和邇浜、櫛井氏と同系列に小野氏（小野神社）、春日氏、柿本氏（人麻呂）→ 浅間大社の宮司も和邇氏の子孫。本拠地：対馬の和邇津？三韓征伐、武振熊命と両面宿禰

日向三代神話：山幸（彦火火出見）と海幸：豊玉姫（八尋鰐）の出産が「ヤフキエズ」、安曇磯良伝説

* 疑問2：聖徳太子はなぜ、小野妹子を 隋に派遣したのか。→ 海洋民の子孫であったから
息長氏・・・伊吹山で日本武尊と敵対する。神功皇后を輩出する。天日槍の系統か？

* 倭国とヤマト国と邪馬台国論争・・・まだまだ迷走中。神功皇后と住吉大社の関係も頭の片隅に置こう。

3、鏡王女（ががみのおおきみ）と額田王（ぬかたのおおきみ）の姉妹について

共に万葉歌人・・・鏡王女：藤原（中臣）鎌足の妻、藤原不比等の母・・・興福寺縁起

額田王：大海人皇子（海族を連想）から→ 天智天皇の寵愛

近江鏡の里の豪族「鏡王」の娘・・・父鏡王は壬申の乱で戦死している。（千僧供古墳群）

* 竜王町には天日槍の従者（技術者）が住んでいたという、鏡、弓削、須恵はその名残りである。

天日槍は、渡来神：垂仁天皇3年に渡来。但馬出石に住、草津穴村「安羅神社」祭神

【参考】垂仁天皇11→景行天皇12→成務13・日本武尊→仲哀天皇14→応神天皇15→仁徳16

4、今昔物語集の安義橋の鬼について

今は昔と云う書き出しで始まる。天竺・震旦・本朝の3部構成で巻第1から巻第31までの平安時代に成立した説話集である。・・・今昔物語集 巻第27 「近江国安義橋鬼喰人語 第13」に収録されている。・・・安吉郷 百済系氏族：安吉 勝（すぐり）・・・雪野山寺、倉橋部廃寺、千僧供古墳群が「比牟礼八幡宮（吉士長丹）は白雉4年653年孝徳天皇の遣唐大使、封戸200（＝安吉郷？）と呉氏を賜うとある。

：今昔物語集は市立図書館にあります。映画にもなっています。→ 「アギ 鬼神の怒り」（1984年作品）

5、和邇の系譜は櫛井氏から目賀田氏へ・・・ついでに、九里氏や三井氏とも関係が・・・

・目賀田氏は近江守護佐々木六角氏の重臣で六老臣の一人に数えられている。目賀田氏の正確な系図は伝わっていないが、目賀田氏が歴史上に現れるのは、鎌倉時代から南北朝時代にかけてのことで、「比牟礼八幡の神主に補された目賀田信職・信音父子」の名がある。

・目賀田（五郎兵衛）信職（入道玄向）は元弘3年（1333）、足利尊氏の六波羅攻めに従軍して戦功があり、建徳元年（1370）信職に比牟礼八幡宮の神職が譲渡されている。

「徳治3年（1308）近江比牟礼八幡神社文書に一井中務太郎入道生蓮から目賀田女房（一井丞正観＝源氏女）に神職と大嶋郷の田畑が譲渡される・・・」さらに「一井正観から目賀田信職（藤原信職）に神職が譲渡された。（『鎌倉遺文』）とある。」・・・市（一）井氏から目賀田氏に相伝されたから、目賀田氏も櫛井氏の同族とするのが自然である。

・比牟礼八幡宮は、大嶋・奥津嶋神社の系譜を引くもの（大国主神・宗像女神を祀る）とみられ、海族（海神）の流れを汲む和珥（和邇）氏族の櫛井臣というのが目賀田氏の本来の出自である。・・・メカタは

目形の意で、海人の風習で目の縁の入れ墨に由来したものか。海神族には胸形（宗像）という装飾もあった。・・・また一説には元々安土山が目賀田山と呼ばれていたのは、内湖に突き出た山（め潟）からきている。という。説もある。・・・いずれにせよ目賀田氏は和邇氏→櫛井氏の系統に繋がる。

・目賀田氏と安土城築城の関係

目賀田山 → 信長に引き渡し→現在の目加田（愛荘町の大字）に移住 → 信長が安土城を築城
六角氏→ 浅井長政→ 織田信長 →明智光秀 →山崎合戦で敗北 2万石没収 一族は離散流浪

・近江の目賀田氏の一族としての三井氏

佐々木道誉の頃の佐々木家人に「藤原信良」があげられる。三井信良＝目賀田信良が三井系図にあげられている。目賀田信職の兄か？ 近江国 目賀田庄に居住？ 目賀田山周辺

・戦国期には三井安隆（小脇城）・・・三井越後守高安・・・高利（豪商越後屋の家祖）

・水荃岡山城の攻防戦の主役となった「九里浄椿」の九里氏も目賀田氏と婚姻関係にあって和邇氏（櫛井氏）とつながってくる。・・・佐々木本郷氏（本郷神社・若宮神社）→九の里村 九里氏（九里館）

・他の城で「近江の山城を歩く」：中井 均・・・法華峰に上社：鶴翼山、阿弥陀寺：北之庄城

六角氏一族には「八幡山 義昌」「八幡山 秀綱」という人物の名が見える。：『江源武鑑』（佐々木六角氏の末期4代の時代を日記形式で書かれた書物）全18巻20冊で構成。その中に六角義郷の事あり、六角義郷は秀吉に見いだされ秀次に仕えた人物。秀次事件により没落する。（佐々木氏郷・沢田源内著）
「天文8年（1540）2月8日：長命寺尼寺から出火し本堂に燃え移り、一字も残らず炎上する。」とあるのを見つけたが、これは、長命寺の観光案内をしていると必ず説明する「長命寺曼荼羅」という勧進に出てくる「穀屋寺」のことであろう。私たちは、「長命寺の火災は、永正13年（1516年）、六角高頼と伊庭貞隆の対立による兵火・伊庭氏の乱により伽藍が全焼する。現存する堂宇は室町時代から江戸時代初期にかけて再建されたものである。」と説明しているが、この火事はもう少し後の出来事なのだろう。江源武鑑は天文6年から元和9年（慶長一元和一寛永）までの記録である。

観音正寺が聖徳太子の創建とされるのも狭々貴山公が聖徳太子（厩戸皇子）の側近の秦河勝の一族愛智秦公と縁戚関係にあったからだろう。・・・聖徳太子創建と云われる寺院が近江には多い：例：百済寺 渡来系人々の信仰 →渡来系の人々が多く住んだのが近江である。

今は聖徳太子1400年御遠忌とともに最澄1200年大遠忌でもある。最澄は766年か768年の天平の奈良時代の生れで、生誕地は瀬田川周辺か坂本と云われている。最澄の俗姓は三津首、俗名は広野といい、父親は百枝と伝えられている。「叡山大師傳」によれば三津首氏（三津が氏で、首は姓）は中国・後漢の孝献帝の末裔で、応神天皇の時代に近江国志賀郡に居地を賜り又三津首の氏姓を賜った。という。つまり、最澄も応神朝に渡来した渡来系氏族である。・・・近江国志賀郡とはよくよく海人に関係ある土地柄である。しかも「三津」とくる。津とは港の意味である。なお八幡宮と稲荷神社はもちろん日吉大社や上賀茂・下鴨神社も秦氏と強い縁で結ばれていることが分かる。秦氏と云えば養蚕と機織りである。養蚕から「オシラ様」が連想し白は白山比売（菊理媛）の白山神社となる。白山信仰と朝鮮の白頭山・「白丁」。秦氏は新羅系渡来人。だから百済系に追いやられた秦氏は民衆に溶け込んでいった。また白鬚神社（比良明神・猿田彦）と猿女（芸能の神）にも秦氏が関係しているのでは・・・。

6、聖徳太子について・・・没後1400年ということで・・・

聖徳太子の虚像を作ったのは秦氏と藤原氏である。

蘇我氏から藤原氏への権力の移行。藤原不比等の「日本書紀」編纂の目的 → 聖徳太子を蘇我氏に

滅ぼされた悲劇の英雄としてその役割を創作。・・・民衆の太子信仰：鎌倉仏教にまで影響を与えた。

蘇我氏の始祖：武内宿弥 のこと・・・海族（海部・尾張氏）、秦氏と八幡信仰（応神天皇）？

秦氏と太子信仰。・・・【疑問1】の答え：八幡とは応神天皇を指している。

7、近江の他の古代豪族・・・（近）淡海国造、安国造、三上祝氏について

桐原7郷：中小森村を中心に条里制が敷かれていた。・・・その中心が菅田神社。（近江八幡安土の神社）

熊沢蕃山の勉学の地（母方の祖父・熊沢守久）・・・小森氏、伊庭氏とも縁戚関係があった。
小森城跡あり。佐々木系統か？

菅田神社・・・天目一箇神 =菅田首の祖 （天目一箇命）の子が饒速日 *注意

（忌部氏の祖とも・・・） 蒲生（物部）稲置の祖でもある。

御上山（三上山） 天之御影命と同一神 =天津彦根命の子・・・三上祝氏：物部氏と同族

*共に 鍛冶の神様 ・・・大岩山の銅鐸 ・・・倭国・物部郷の製鉄技術

安氏（安^{やすのくにのみやつこ}国造）は、野洲地域を支配していた。・・・三上（祝）氏は分流（ニギハヤヒ）

青銅器文化の担い手は、安氏。・・・円山・甲山古墳（安国造一族の墓域）

三上山は、藤原秀郷（倭藤太）のムカデ退治伝説でも知られている。・・・蒲生氏郷

日本武尊^{やまとたけるのみこと}が妃・布多遲比売命^{ふたぢひめ}（父は近江安国造）との御子「稲依別王^{いなよりわけのみこ}」から犬上建部君が、

同じく日本武尊と布多遲比売命の子に仲哀天皇がいる。

安（野洲）本家は、壬申の乱で、大友皇子（弘文天皇）に付き敗戦後は、力を弱め、犬上君氏
や建部氏にとって代わられます。・・・犬上君と建部の祖は、ともに「稲依別王^{いなよりわけのみこ}」

【淡海国造^{おうみのくにのみやつこ}】 安国造と同一の国造であると受け取られるが、別系統・・・淡海氏とする。

→瀬田・大津地域を本拠地にした → 後に 淡海安国造を併合したとも云う。

13代成務朝時に 彦座王3世孫の大陀牟夜別が淡海国造に任じられたとする。「古事記」によると祖は「天押帯日子命」で、和邇氏、春日氏、小野氏と同系とあるので、海人の和邇族と同族。

・武内宿祢子孫のひとつである淡海臣と同族であるとか諸説あるが、蘇我氏と密接な関係を持っていたらしい。 *国造の制度があったのは、古墳時代から律令制度以前まで

応神天皇の5世の孫（オオド）として26代継体天皇が登場 !?

近江国高嶋郷で誕生→のち 越前にて成長 ・・・近江豪族（和邇氏、息長氏）の製鉄技術や尾張連（海部）の勢力を背景にヤマトに入る。・・・仁徳王朝 → 継体王朝へ は物部から蘇我へ :: 上宮記（かみつみやのふみ）逸文：記紀以前の書 =蘇我氏一族の歴史書—藤原氏が抹殺。（乙巳の変645年）ちなみに、聖徳太子は継体天皇の曾孫です。・・・「上宮記」をもとに藤原氏が聖徳太子をスパースターにした。（=日本書紀）

*蘇我氏と対立した物部氏について：神武天皇よりも前にヤマト入りをした饒速日（ニギハヤヒ）命

が祖先と伝わる、登美夜比売（とみやびめ：古事記、）を妻とし物部氏の初代の宇摩志麻遲命をもうけた。登美夜比売（又は長脛姫・三炊屋媛）というはナガスネヒコ（長脛彦）の妹なり。・・・長脛彦は神武が畿内に入るのを邪魔した者。物部の饒速日又は宇摩志麻遲命が長脛彦を裏切り神武を助けた。

長脛彦は「徐福（伝説）」と関係が？ →アラハバキ神 = 荒脛巾神社・・・東日流外三郡誌
*ニギハヤヒ=天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊（アマテルクニテルヒコアメノホアカリクシタマニギハヤヒノミコト）→ 出雲族か？ 元伊勢=籠神社祭神 → ニニギよりも先に天孫降臨していた神で天磐船に乗り「十種の神宝」を持ってきた。=石上神宮（物部氏）七支刀等。また「瀬織津媛」（祓戸大神）を天照大神の皇后とする？説もある？記紀ではニギハヤヒはニニギの兄弟？・子？

又、彦火明命は宗像の瀬織津媛（市杵島姫命とも云われる）を妻にした。・・・籠神社：海部氏系図
出雲系：大歳神=饒速日命である。物部氏の祖・饒速日命は、物部氏滅亡と共に消されていった・・・

【高田崇史】小説家：伊勢神宮には皇女が斎宮として赴きますが、なぜ女性が赴くのでしょうか？まるで嫁入りのようです。元々、天照という男性神がいたものの、その神が殺され、妻であった天照大神が祀られるようになったのではないかと。その天照という男性神はニギハヤヒのことで、のちに大和朝廷を作りあげる人々に殺されたのではないかと推測されています。天の岩戸隠れという物語は、殺されたニギハヤヒを岩戸に葬り、当時の様式で葬儀を執り行ったことから来ているのではないかとのことです。その後、大和朝廷を作り上げた人々は、ニギハヤヒの妻だった女性を祀り上げ利用しました。これがいわゆる卑弥呼(日の巫女)ではないかと。太陽神「天照」の巫女だから、ヒミコというわけです。古事記、日本書紀にはなぜか邪馬台国や卑弥呼のことが出て来ません。これについても諸説ありますが、自分たちが利用し、殺した存在だから、載せられなかったとも考えられます。・・・「QED シリーズ」「古事記異聞シリーズ」等

・三輪山の大神主神とは？=ニギハヤヒ のことだと云われている。・・・大国主（大己貴神）の幸魂・奇魂 と説明。

・オオモノヌシ：多くのモノの主・・・「もののけ姫」を連想、*モノ（物）とは「モノノケ」のモノ（鬼・霊的存在）の気配を指す。

・八千矛神=兵主大社・・・日吉から白蛇に姿を変えて亀の瀬に乗り琵琶湖を渡る。上陸後は鹿が守りこの地に着く。

・箸墓は倭迹迹日百襲姫命の墓？ 大神主は蛇神だから海神でもある。*神道の中核は穢れを「祓う」=祓戸の4大神

8、「鬼滅の刃」から隠された歴史のメッセージを読み解く=神話との共通項

「鬼滅の刃」で鬼殺隊の「蛇」と云えば「伊黒小芭内（いぐろおばない）」であるが日本神話では大蛇の「化け物」としてのヤマタノオロチ。・・・記紀が描いた日本の鬼の原像、大神主神なども 水神も蛇 大和政権からみて「鬼とは」・・・化外の民、まつろわぬ民：草薙剣=民草を薙ぎ倒す剣である。

土蜘蛛・・・那田蜘蛛山での炭治郎達の鬼殺隊との戦い → 夷（鬼）を以て夷（鬼）を制す。
酒吞童子、羅城（生）門の鬼・・・桃太郎の系譜に連なる「鬼退治の物語」：節分（追儼）

「鬼滅の刃」の鬼達はなぜ、藤を嫌うのか・・・藤は藤原を表す。闇に闇をぶつける日本の歴史
平安貴族を苦しめたもの・・・雷、疫病、災害等・・・退治するか、鬼・怨霊を封じる。

上賀茂神社：賀茂別雷神 下鴨神社の祭神はタケツノミ（賀茂建角身命）=八咫鳥である。

タケツノミの娘：（賀茂の玉依比売）が大山咋神（オオヤマクイ）=火雷神の化身を夫として産ん

だ子が賀茂別雷神である。・・・また、オオヤマクイは松尾神社にも大山昨神と市杵島姫命として祀られているが、古事記には「大山昨神は日枝山に坐し、また松尾に坐して鳴鏑矢を用つ神」とある。そして、松尾大社を創建しているのは「秦氏」であることにも留意。京都・太秦の地は秦氏の本拠地であった。・・・秦氏は白山神社との関係や芸能とも関係がある。また、八幡・稲荷しかりである。

- ・竈門炭治郎は炭焼きであり、製鉄関係者。父は漂泊の芸人（傀儡子）とみる。

- ・鬼舞辻無惨は平将門がモデルであり、炭治郎は藤原秀郷がモデルである。・・・納得

- ・TV アニメ「鬼滅の刃」は「遊郭編」である。そこで活躍する柱は、宇髄天元である。彼は忍者の出身である。・・・実は「聖徳太子」も大伴細人を「志能便」として使っていた。他に秦河勝と服部一族も志能便として登用していた。秦河勝は聖徳太子のブレーンの存在であり服部氏も秦氏の一族であった。：そしてそれが事実なら聖徳太子は甲賀・伊賀の忍者の創設者である。余談だが、

- ・ガイドで案内する「伴伝兵衛・伴庄右衛門」の初代は伴太郎左衛門尉資家であり。元は大伴→伴本能寺の変で初代は討死した甲賀武士。・・・大伴細人の流れをくむもの

- ・豊臣秀次公にも「服部一忠＝服部小平太」という、服部一族の家臣がいた。

服部小平太は、今川義元に一番槍をつけ、毛利新介（良勝）が首を打ち取った。

毛利新介は本能寺の変で討死。服部一忠は秀次事件に連座して切腹している。

小平太の弟：小藤太も本能寺で討死。小平太の子の勝長は紀州徳川家に仕える。→後の御庭番か？

吉宗と一緒に和歌山城から江戸城に入ったものとして「広敷伊賀者」「伊賀御庭番」の名が記録に見える。・・・伴家は「大伴氏」の甲賀武士の家系。滝川一益、中村一氏、池田恒興がいる。

・伴伝兵衛（2代目）：明暦年間 江戸日本橋「近江屋」の主人と柳川藩主立花左近将監忠茂（2代目藩主）との関係・・・「近江屋」の「松飾り」が有名な話です。・・・柳川藩は 最初は 八幡堀や山下町を作った「田中（九兵衛）吉政」が石田三成を捕らえてもらった領地であった。（町づくり等で土木の神様と云われた）・・・2代で改易となり、その地に立花宗茂が入る（回復）。以後明治まで続く。・・・水郷・柳川の川下りは有名。・・・北原白秋の故郷でもある。

* 田中吉政と山形屋初代 西川仁右衛門の関係：田中吉政が図面を引き、仁右衛門が現場を指揮して最初から八幡の町を「商人の町」として作っている。だから城主を失った町衆が奮起して、行商に出て行ったということではなく、なるべくして商人町は出来たのである。・・・最近、八女市にある「田中吉政研究会」の方と Facebook で交流ができ情報交換などもしている。

【西川家】家伝では・・・永禄年間に蒲生郡（南）津田村に居住した、元六角家の家臣「市往右兵尉吉久」を祖とし、八幡城下に移転し「西川」と改めた。とある。

本家：西川右兵衛家、吉久の子の吉春の次男が分家して：西川傳右衛門家・屋号・松前屋（近江）、住吉屋（松前）

養子（旧姓木原氏）：西川利右衛門家：屋号・大文字屋一分分家：西川庄六家

* 元越前朝倉氏家臣：西川家の養子＝木原勘右衛門数吉の子・数政が利右衛門（初代）―長男利右衛門（2代）重数、次男：西川庄六（分家）、四男：西川仁右衛門（分家）：近江屋？

分分家：西川仁右衛門（西川甚五郎）家：屋号・山形屋 ……とする資料もあるが、・・・ある資料には大工組西川家とある。＊＊別系統か？分からなかった。知っている人がいたら教えてほしい！

「先義後利榮 好富施其徳」(義を先にし、利を後にすれば栄え、富を好しとし、其の徳を施せ)・・・商いは目先の利益よりも遠きを見てすることが大切であると教えた。この考えは荀子が説いた「先議而後利者栄」の影響を受けたものと考えられる・・・江戸時代、享保年間、京都で呉服商をしていた「下村彦衛門」は「大文字屋」という屋号で商売をしており、「先義後利栄」の家訓を同じように残している。調べたが関係性は無い様だ。京都伏見で下村彦右衛門正啓の創業した呉服商(享保2年)は後に「大丸」百貨店となったが、先義後利は社訓として存続。

・・・津田が出てきたついでに、津田つながりで、平親実(親真)(津田親実・織田親実)について・・・9, 織田信長の先祖について: 織田家の系譜を考察する。

* 織田信長に代表される戦国大名ー織田氏が越前国丹生郡織田荘を本貫とする豪族から起こったことは、大体の学者の一致する見解となっている。問題はその以前であるが、弟の織田長益(織田有楽斎)が幕府に提出した武家家伝(系図)では、「平清盛ー平重盛 ー平資盛ー津田親実・・・織田家始祖・・・信長」とある。

平資盛の愛妾を津田庄に匿い、後に津田豪族の後妻に入った。その時既に「親実」は生まれていたのです、津田氏の養子にした。

織田一族の発祥地は越前国織田荘(現・福井県丹生郡越前町)にある劔神社である。本姓は藤原氏(藤原北家、のちに桓武平氏資盛流を称する)。実際は忌部氏の流れを汲むとされる。・・・信長は藤原氏も名乗っているが、最終的には「平氏」とした。

*** 資盛が親真の母への餞別として詠んだという「近江なる津田の入江のみをづくし、見えぬも深きしるしなりける」という和歌が伝わっている(「織田系図」)・・・母の名と出自は分からない。**

その辺の所を、ある作家はこう書いている。・・・『その後の織田一族』 杉本苑子 より索引/

「平清盛の孫、資盛は平家一門が都を捨て西海へ落ちようと言う瀬戸際に、一人の愛人を近江の津田の庄に身を隠させた。

その愛人に資盛の子が生まれていたからである。子は男の子。女の名は伝わっていないが、一説に三井寺一条坊の阿闍梨真海の姪ということで援助した。ともかく、彼女は資盛の指示に従い近江津田の庄に身を寄せた。だが、女手ひとつ。資盛も戦死、平家一門も滅びたとあって、津田の庄の土豪に求婚され妻となった。このとき資盛の子も共に津田の家に入り継父に養われ育った。この少年を越前丹生郡織田の庄、織田神社の神官斎部某が養子にもらい受けた。少年は名を親真と名乗り、彼が織田一族の祖となる。そして彼の子孫常昌が神社の名、織田を姓に冠して織田を名乗り、越前守護斯波義重に見出され武士としての織田家を築く。」

* 近世大名の織田氏の出自を平氏とする説においては、平家の子孫が近江津田庄(現在の近江八幡市)に逃れ津田姓を称し、その末裔がのちに越前に移住し織田氏となったとされるが、確証はないので、「伝承」としている。・・・また織田氏の直系から見て庶流に当たる一門は津田氏を名乗り、主家との厳格なる区別を付けていた。例えば、織田信長の弟織田信勝(信行)の子津田信澄などが有名である。

* この津田氏は、藤原氏・忌部氏の系統が有力とされている。・祭祀をつかさどる氏族として中臣氏や忌部氏は古代から存在した。

* 書籍やネットの中でこの津田(平姓)を苗字とする織田一族について 「尾張国内で織田を名乗る城主の内、家格が上の嫡流家以外は津田に苗字を改めさせ、織田を名乗ることを禁じた」と、紹介されたもの

も幾つかあります。ですが、その出典についてはどこも触れておりません。江戸時代の徳川一松平の様なものであるとも思えるのですが、徳川のそのように御三家・御三卿と言った明確な家系別にはなっていないようです。話は飛ぶが、平氏の項が出たついでに述べると、「平氏は海人族の末裔である」「厳島神社は平家の氏神であり宗像三女神を祀る」「海人族は航海のプロフェッショナル」「藤原純友の乱には安曇系や宗像系の海人族も参加している」「水軍と云うは海賊（海人族）の事」「中世以降、海人族の末裔は、漂泊民として津々浦々、移動分散して、芸能を伝えていく」「津田の津とは港の事」「津島神社も同じ」このように、津田は、応神天皇のころから海人族との深い歴史を持っているのです。・・・

10、近江八幡の城について・・・ここからは付け足したいなものです。

南津田町の八王子神社を登ると、「石舞台」があります、昔の古墳群の跡らしいです。また少し上がると「南津田城」の跡（石垣）に出ます。もっと登ると八幡城の「出丸」に行き付きます。南津田の真念寺の住職は現在、「有村氏」です。：井伊大老の暗殺に関係した薩摩浪士「有村次左衛門」の関係者の子孫。真念寺の向かい側に「津田親真」の顕彰碑が建立されている。・・・でも南津田城は載ってないんだよね。

真念寺由緒：文明2年（1470）蓮如上人が江州の南津田に来られた時、村人がこぞって蓮如上人の説法を聞き、浄土真宗の教義に帰依して、仏法を聞法する道場を建立された。蓮如上人が建立した道場を「惣道場」とし、惣村の小林又左衛門（法名長春）が道場を守った。その後、元亀年間、信長との11年間にわたる本願寺合戦では、嫡子又左衛門が山科本願寺攻防戦で戦死、次男又二郎は堅田で戦死、三男の慶正が道場を嗣ぐ。五代慶春従軍し戦死。六代慶善の時、教如上人に帰依し大谷派に属す。・・・村人が「講」を通じて石山合戦や赤野井別院での合戦に参加している。

近江八幡観光物産協会が「市内に点在するお城」を紹介：番号はHPのママ。・・・できれば注釈・解説がほしい。

1、八幡山城 宮内町 2、浅小井城 浅小井町 3、宇津呂館 中村町 4、岡山城（水茎館）牧町 5、沖島尾山城 沖島町
6、沖島頭山城 沖島町 7、沖島坊谷城 沖島町 8、長田城 長田町 9、小田城（高畠氏館）小田町 10、北津田城 北津田町
11、北之庄城 北之庄 12、久郷屋敷 上田町 13、倉橋部城 倉橋部町 14、小森城 中小森町 15、金剛寺城（金田館）金剛寺町
16、田中江城 田中江町 17、谷氏館（友定城）友定町 18、長光寺（瓶割城）長光寺町 19、西宿城 西宿町 20、野村城 野村町
21、船木城 船木町 22、本郷城（久里城）金剛寺町 23、馬渕城 馬渕町 24、牧村城 牧町 25、円山城 円山町
26、安土城 下豊浦 27、観音寺城（佐々木城）石寺、宮津 28、香庄館 香庄 29、金剛寺城 慈恩寺 30、常楽寺城（木村城）常楽寺
31、平井館 下豊浦

*以前に、研修部会で市内の「お城」講座をされたが、ほとんどの城については分からなかった。再度、誰か講師で説明できる方をお願いしたい。（要望）・・・安土城・八幡城・長光寺城・水茎岡山城・観音寺城は除く。例えば、丸山城（円山城）なら六角氏の支流（氏綱が西条氏を名乗り）その「西条氏」が

城砦を作ったとある。・・・その西条氏の子孫は 遠州・頭陀寺城の城主である「松下加兵衛之綱」であり、羽柴秀吉の最初の主人である。また織田信長は安土城ができるまで近江逗留中は木村城で過ごした。その木村城は、秀次の家臣で事件に連座して切腹した「木村常陸介重茲」とはどういう関係なのか等々・・・ほとんどの市内の城は佐々木六角氏（小森城は熊沢蕃山屋敷跡に）と関係のあるお城だろうが、織田信長とも関係するお城もあるので・・・近代相撲の発祥は安土からということだが、長田町の近くには「力士塚」もある。安土時代には処刑場の跡（安土問答での法華衆2人の石碑）である「シガイの森」も今は心霊スポットになっていることなど・・・また豊臣秀次公の謀殺理由と秀吉の残虐性。絶えたはずの秀次公の血筋・子孫の話など、お鍋の方、活津彦根命（安土）、大伴氏等 まだまだ言い足りないのだが、テーマから逸れすぎるので一応こちらで終了させていただくことにする。なお、この講座を準備するにあたって、神社のことも勉強させていただいた。神々の中には記紀神話に登場しない神様もあり（八幡、天神、稲荷など日本の神話とは無縁な神々）、神道の神だけでなく仏教の菩薩となった八幡神＝八幡菩薩などもいて興味深いものがあつた。皆さんも普段の地元の氏神神社は祭神は何なのか、調べてみることをお勧めしたい。

（VG 西川）

2、和邇氏と日牟礼八幡宮

VGの研修部会の講座の関係で近江の古代豪族「和邇氏」と「日牟礼八幡宮」の関係を調べていたが、どうしても判らなかつたところが「宮司」（岳氏）のことが、思いがけずに判つたようだ！（講座のレジメ1-⑥参照のこと）元々「日牟礼八幡宮」は和邇氏の一族の櫟井（いちい）氏であつたが、途中で、同族の「目賀田」氏に代わつた。その後の経過が判らず現在の岳氏に至るわけである。それが沙沙貴神社と佐々木源氏を何気なく調べていたら、偶然「岳」氏も伊庭氏や目賀田氏＝三井氏と同じ佐々木源氏だということが判つて、なんとなく納得しました！沙沙貴神社の岳氏（その前は伊庭氏が宮司）関連のことも知ることができました。元々は「佐々木宮」は佐々木行定から始まり、その後一族の木村氏や深尾氏などが宮司を務めたことも判つてきたのですが、まだ地名か氏姓か分かりにくい部分があり悩んでいます🤔また山陰の尼子氏や家臣の山中（鹿之介）の子孫の鴻池や乃木（希典）家までも近江佐々木源氏の一族だって改めて知ることができて良かったです・・・岳氏は系図では佐々木定綱からの別れであると後日分かりました。

3、余談

①皆さん、明けましておめでとうございます🎶古代の近江豪族（海人族）を調べていたら、他の地域の熊野三神（宮）社の祭神や両面宿禰（すくな）、白山神社の菊理姫命などの神様についても、もう一度確認しておこうと思って、調べています！！両面宿禰は美濃木曾に居た鬼神様ですが武振熊命に征伐されますが、武振熊は和邇氏の祖です😊こんなところにも海人族との関わりがあることを初めて知りました！これは、講座のレジメには出てこない部分です！

②VG研修部会の座学講座の講師をするため西川仁右衛門家と西川利右衛門家の関係を調べていましたが、どうも、山形屋西川よりも利右衛門や庄六家（大文字屋）は西川伝右衛門家（住吉屋）との関係（家系）が深いことが判りました！勿論、山形屋西川仁右衛門家は始祖を元六角家家臣で南津田出身としていることから西川伝右衛門の家系に繋がることも分かりました！！お騒がせしました😊ごめん🙇

③どなたか知っていたら教えてください！私たちは「先義後利」と言う四字熟語(儒学)の家訓は八幡商人の大文字屋西川利右衛門(商店)の家訓として教えられてガイドしていますが🤗同じ大文字屋ですが同時代の京都にあった同名の商店にも「先義後利」の家訓がありました。「下村彦右衛門」で検索してください。今の「大丸」の創業者です🎵同じ家訓を今に伝える八幡商人の大文字屋と京都の大丸(大文字屋)との関係性を調べたけど、さっぱり分かりませんでした。なんの関係もないのでしょうか？2軒とも大文字屋で家訓が同じなのですが🤗同名異店なののでしょうか？よろしく🙏🙏お願いいたします！

④VG 研修部講座の八幡商人の関係で「伴伝兵衛」家を調べていたら「伝 森蘭丸公」の具足甲冑が、伴伝兵衛家に代々伝わってきたという記事(net 検索)があった!! 伴家と森家は深い繋がりがある。本能寺の変で伴家の祖伴太郎左衛門尉資家(甲賀武士=忍者列伝にもある有名な忍者)が討死し、息子の資規が武士を捨てて商人となり伴庄兵衛と称する。その子が伴伝兵衛と伴莊右衛門家に分家していく。伴家の資家が討死した際、(蘭丸三兄弟も討死)森家最後の弟の忠政を伴一党が甲賀に匿って助けた経緯があった。その縁で森蘭丸の具足が伝わったのかもしれない。また伝兵衛家の「別家」「森五郎兵衛」も「森」である。何か因縁めいた関係を感じてしまいます!! ちなみに最後に撮した写真は「秀次公甲冑」と「森蘭丸公甲冑」です🎵レプリカですけど、身につけられる具足甲冑として利用しています👏

シリーズの本文はここから・・・

【ヒデじいの歴史探偵ガイド話】

5、日牟礼八幡宮と和邇氏の関係についての一考察----

日牟礼八幡宮御由緒によれば「応神天皇 6 年(275)天皇近江行幸の折、宇津野々辺にご少憩になり御座所を置かれた。その後、年を経て御仮屋の跡に日輪の形 2 つ見ることが出来た。(幻日と云う)それ故に祠を建て日群之社と名付く。持統天皇 5 年(691)藤原不平等が参拝し和歌を詠んだ。(天降りの神の誕生(みあれ)の八幡かも ひむれの杜になびく白雲)その和歌に因み比牟礼社に改む。さらに正暦 2 年(991)一条天皇の勅願により宇佐八幡宮を勧請して法華峰に上社を建て、寛弘 2 年(1005)に遙拝の社を麓に建て下社(八幡宮)と号す」とあります! 豊臣秀次公の八幡城築城に際して上社を麓の社に合祀した経過は、ご承知のことです。ここで疑問が 1 つ! 宇佐八幡宮を勧請したのが 991 年で、藤原不平等の和歌が 691 年です。300 年も前に「八幡」と何故云われたのでしょうか？よくよく考えると応神天皇は産まれた時から「八幡神」(宇美神社縁起)になっており、藤原不平等の時代には応神天皇=八幡神という認識をしていたということです。さて、次からは神社の「御由緒」(略誌)には書かれていないけど、「古事記、日本書紀」に記されている部分です。応神天皇が近江行幸の折りの途中に山背国宇遲野木幡村にて「宮主宅媛(宮主矢河枝比売)を見染めて父親の名を尋ねると「和邇日触使主(丸邇之比布禮能意美)」と応えます。娘からこの話を聞いた和邇(わに)の日触使主(ひふれのおみ)は尋ねた方は応神天皇ということに気がつき、宴でもてなします。その時、天皇が歌った「この蟹何処の蟹、角鹿の蟹、…」は有名ですが、天皇が食した蟹は越前蟹で、当時の日触使主=和邇族が越前から琵琶湖を経て宇治川までの水運交通を支配していたことを証明しています。この和邇族(和邇氏)から櫛井氏、春日氏、小野氏、柿本氏などが分かれます。そして日牟礼八幡宮は代々、櫛井(いちい)氏が社家を務めてきました。八幡祭の起源は応神天皇の近江行幸からと云われています。今も市井町は八幡祭の 13 郷の 1 つです。社家(宮司)は鎌倉時代に櫛井氏から

目賀田氏に移りますが同族(和邇族)です。目賀田氏は武士として近江佐々木家に仕えますが、織田信長の安土城築城にも一役果たしますが、この話は後年のことです(胸に刺青をした胸形=宗像、目に刺青が目形=目賀田で、いずれも海人族の特徴です!)😄話を戻します。応神天皇は、宮主宅媛を見染めて后とします。そして産まれた御子が「菟道稚郎子・うじのわきいらつこ」と「八田皇女=のちの仁徳天皇の後」です。さて、ここで「ウサギとワニ」が登場しますが、神話にもありましたね。(出雲族には海人族もいます。安曇族、海部氏です)あのウサギは宇佐族=宗像族ですが、菟道稚郎子の祀られている「宇治神社、宇治上神社2座」にもウサギがいます。それはともかく、菟道稚郎子は皇太子でしたが、兄の仁徳と皇位を争い自殺?します。(播磨国風土記では宇治天皇と記されている)その代わりに妹の八田皇女が仁徳に嫁ぎ后になります。菟道稚郎子の学問の師は和邇吉師(王仁博士)です。この時代は秦氏の弓月君などの有名な渡来人が多く来ています。王仁は千字文などの漢字を伝えた人物です。以上で日触使主の項は終わります。今回は、和邇族=春日氏と春日大社=藤原氏の関係や小野氏(小野妹子、小野小町、小野道風、小野篁)のこと等(山幸彦が海幸彦の釣り針を見つけて鰐の背に乗って帰る話もある)について少し話して、日牟礼八幡宮の祭神の息長帯足媛と比売神(宗像三姫神)についての話を主軸に話したいと思います🙏もちろん、この話は研修部会の講座でもお話する予定ですが、、、、…!!事前に古事記などの神話を予備知識として頭に入れておいて下さい😓いきなり、八上姫やオオナムヂと言っても面食らうだけです。これは「稲羽の素戔」の場面ですね!白ウサギとは書かれていませんよ!!「和邇ワニ」をサメ鯨とは書かれもいませんですね❤️神話も知らない初心者が古代史に入るには写真の本がオススメです。ヤタガラスの娘はいわゆる学術書ではなく読み物ですが、神様の名前を知っていないと、ちんぷんかんぷんです😄例えば、出雲の国譲りで出てくる八重事代主神は八尋熊鰐になって玉櫛姫(三島溝杭姫、鴨建角身の娘とか)に通い、生まれた子は天日方奇日方命(三輪氏の祖)である。……、!など、事代主命神はヤマト建国にも関わっている重要人物です!!別名はエビス様と云われます!!また神武天皇の兄の稲飯命は東征の途中、熊野沖で海に入り佐比持神の神になったと日本書紀にある。サヒモチの神は別名、一尋和邇ともいう🎵神武の父のウガヤフキアヘズの母もワニである。ある神はワニの子であり、ある神はワニになられたのである。古事記は国内向けに天皇の正統性を示したもので、日本書紀は国外に向けてヤマト→日本の存在を示した書物(国史)である。単に荒唐無稽の神話と片付けてはならない。と思います❤️なお、日牟礼八幡宮には上社と下社がありましたが、秀次公の八幡城築城時に上社は下社と合祀されました。八幡山には、聖徳太子伝承の開基寺があったとされ、現在も、阿弥陀寺、法華峰、などの地名が残っています。

6. 八幡神

「われは菅田(ホムタ)の天皇(スメラミコト)広幡八幡磨(ヒロハタノヤハタマロ)なり。わが名は護国靈驗威力神通、大自在王菩薩と号す」これは八幡大神(ヤハタノオオカミ)が、三歳の童子として宇佐の小椋山麓の菱形池に示現された時の八幡大神の御託宣である。29代欽明天皇32年(571)大神比義により宇佐の地に示顕したと伝わる。つまり八幡神は応神天皇(菅田別命)の神霊と菩薩(文字通り「仏神」)として突然現れている。(応神天皇は実在が確認される最古の天皇だと云われる。人皇の神)大神比義は三輪山の大神の系統である。欽明期に百済から仏教が伝来した。欽明の父や孫は誰か?系図を念頭におくと時代背景が理解しやすい。当時は蘇我氏と物部氏が仏教を巡り争っていた時代である。また、八幡神の顕現には2系統の伝承がある。1つは冒頭に記した大神氏の応神御霊で、もう1つは辛嶋勝(スグリ)の「八幡宇佐宮御託宣集」に「辛国の城に、始て八流の幡と天降って、吾は日本の神と成れり」という著名な一文がある。

「辛(カラ)国」は韓半島ともされ、新羅神が降臨したと考える人もいる。何故なら「辛嶋氏」は当時、北九州地方に住み着いていた秦一族(新羅系渡来集団)であるからだ。九州にいる私の孫が宮詣りした宇美八幡宮(敏達天皇 570 年頃創建)の御由緒には、三韓征伐より帰還され応神天皇がご誕生の際に御産舎の四辺に八つの幡を立て兵士に守らせた故事があり「後世、八幡大神と称するは此の故なり」と伝えられている。いづれにせよ、八幡神は古事記や日本書紀には載っていない神である。

ボランティアガイドの研修部会で「八幡神」の講座が5月にあるので、いちおう、調べておこうと思ったのだが、なかなか曲者である。八幡神だけで2系統の縁起なのに、原始八幡信仰と言うべき宇佐氏の「比売神」系統が加わり、さらに住吉神に守られた神功皇后が加わり八幡三神(八幡は住吉の子と云われる由縁ですね)或いは、八幡大菩薩とも云われる！最も理解しにくいのは僧形八幡神座像よりも「比売神」が中央で左右に応神と神功を従えているように見えることです😊「比売神」を卑弥呼(一説には宇佐豊玉姫)と考える人もいるみたいだが、宇佐氏が天三降命とした「宇佐明神」は御許山(宇佐嶋?)の三巨石で、すなわち、宗像三女神です。宇佐氏は応神以前の神武天皇の東征時に「宇佐津彦、宇佐津姫(菟狭津媛)」が「一柱膳宮」で出迎え、菟狭津媛は神武の侍臣「天種子命(中臣氏の遠祖)」と娶らせられ宇佐氏は宇佐国造と成る！つまり八幡神には、宇佐氏、辛嶋氏、大神氏の3系統が関係しているのである！さらに東征神話で藤原氏も関わっていたと思われる。神仏習合(神宮寺としての弥勒寺)のキーパーソンとしての法蓮も難解です。記紀神話に遡る宇佐氏の比売神祭祀(宇佐のウサギは月の神=月読命でもある)、新羅の神を祀る渡来系集団・辛嶋氏と応神天皇の神霊を奉じた大和の大神氏、隼人平定の八幡神軍、そこまでが八幡神発祥の経過、第1部としたい！?ということは続編もあるということで、…！続編は今度の研修部会の講座内容次第ということで🌞もし続きがあるとすれば？八幡大神から八幡大菩薩への新たな信仰と鎮守の展開とだけ決めておこうと思う🎵第2部は武士の台頭と南無八幡大菩薩でいきます!! NHK 大河の「鎌倉殿の13人」では源義経が八幡大菩薩の化身と云われていました。初めて知って新鮮でした。八幡太郎義家なら有名ですけどね。新羅三郎という人もいましたが、鶴岡八幡宮は源氏！八幡仏教徒も八幡宮の衆徒？また「鎌倉殿の13人」では、チョイ役であった「源頼政」ですが、こちらが源氏本流で「鶴を退治した」武者であった!!・・・履歴を見ると私ばかり連投して、本当にすみません😭🙏🙏🙏会員関係者各位の皆さんも、投稿をお願い致します❤️

5月のVG研修部会の座学講座があった。Nkさんの担当でテーマは「八幡神の源流」であった。さすがに前研修部長のNkさんです👍よく調べておられる！〇〇とは大違い！宇佐氏、辛嶋氏、大神氏、三者のまさしく巴紋のごとき「八幡神」の由来縁起！その中で、辛嶋「八幡神」が母子神信仰であったこと、(どうりで三歳の童子が現れたわけである)この母子神信仰が「神功皇后の母と子の応神天皇」になり、更には童子が母から独立して=「太子信仰」(弥勒と末法思想)にまで繋がっていくということを今回の聴講で勉強させてもらいました!!怖るべし否、敬うべきは「八幡ヤハタ神」なり!!辛嶋氏は秦一族である。

「隋書」倭国伝に云われる小野妹子が案内した「秦王国」(豊国)の一派！「辛」とは「加羅」国で後に新羅に吸収された。辛嶋氏の奉じたヤハタの神は「新羅」の神になった。そこに蘇我馬子の意を受けた大神氏が日本の国家神としたのである。「辛国の城に、始めて八流の幡を天降して、吾は日本の神となれり」である。しかし、恐るべきは「秦氏一族」である。まさに「歴史の陰に秦氏あり」であります！秦氏の「ヤハタ神」はしぶとく「はちまん様」となって全国に鎮座されている。(なぜ、八幡神社が全国で一番多いのかという英彦山等の山岳宗教と神仏習合による護法神としての八幡仏教が庶民に流布し、その

後全国の源氏=武士が信仰して広めたことが主な理由)また、母子神信仰は「太子信仰」(皇子ではなく聖徳太子)となって、最澄や空海にも影響を与えた。親鸞や日蓮などの鎌倉仏教まで影響力を及ぼしている！太子没後 1400 年で現在、「聖徳太子」イベントをすることも影響の 1 つである。ちなみに、「八幡神社」は秦氏が深く関わっているのですが、さらに松尾大社や広隆寺、稲荷大社も秦氏の創建だったものですね！！近江に聖徳太子所縁の寺社が多いのも、秦河勝の子の秦朴市=愛智秦氏が関係していると思っています！新羅=花郎ファラン=童子=太子=救世観音=弥勒という図式です。比叡山はオオヤマクイノ神、(天台神道もある)そこは秦氏(松尾大社の祭神と同じ)の領域だった。由縁に三井寺には弥勒菩薩を奉じて、新羅明神までおられる。空海の東寺にも左右に八幡社と稲荷社が配されています👉ついでに言えば、源氏の八幡太郎義家は岩清水八幡宮で元服したから八幡太郎、三井寺の新羅明神で元服した弟は新羅三郎義光という。では源義経は元服名は「九郎義経」と平凡だが、元服地は「鏡の宿の鏡神社」である。鏡神社には「天日槍」が祀られている。「天日槍」は「神功皇后=息長帯媛」の祖先神であることから納得です！(八幡神とも関連付けできた。)(余談だけど、鏡神社から R8 を西に少し行った場所に平宗盛の胴塚がある。そこは平家終焉の地である。義経が処断した。)なお、村上源氏や嵯峨源氏など源氏 21 流と云われる中、清和源氏だけが何故「八幡神」と密接なのかといえば、氏祖の清和天皇が宇佐八幡から男山岩清水に八幡宮を分霊したからである。ちなみに、佐々木六角氏は宇多源氏ですけどね。(来年の NHK 大河は紫式部の光源氏ですが、架空ながら桐壺源氏になります！)また宇佐八幡神宮には八幡神が具現のおり鷹になって降り、金色の鳩になって飛び立った、という故事もある。宇佐から岩清水に分霊する際、鳩が先導したとの伝承もある。鷹にしる鳩にしる鳥は秦氏を表すトーテムである。いまの八幡様の使神は鳩である。これは神武東征時の「金鷄」(勲章？)を連想させる。神武に従った鳥はヤタガラス(賀茂族)と金鷄(秦氏)である！この二族は京都で今でも神社の行事で繋がっている。今回の座学講座は、私にとっては有意義でした。(予習もしていなかったフムフムの人には？かな。)VG 会員には、まだまだ多くの人材がおられる！研修部のみならず VG 全体での人材活用を期待します

7、息長氏

日牟礼八幡宮の第 2 段(章)として、「息長氏」(湖北地方が有名ですが)についてです🎵応神天皇=八幡宮の主祭神の母は神功皇后です(この方も祭神です)。名を「息長足姫(息長帯日売)おきながたらしひめ」と云い、その父は「息長宿禰」という。息長宿禰から数えて 3 代目先祖に「日子坐王(彦坐王)ひこいます王」がいます。日子坐王は和邇氏出身で、近江の三上の「息長水依比売」(天之御影神=天目一箇神の娘)を妻としています。その子に丹波道主命=四道将軍がいます。また息長宿禰の母方は、天日矛を祖にもつ田島間守氏である。天日矛の従者が住んだ須恵や鏡の近くの三上山の「御上神社」は天之御影命=鍛冶の神を祀っています。中小森町の菅田神社も同じ神です😊「息長」とは製鉄民(ひょっとこ=火男)ではないだろうか！？つまり神功皇后は海人(和邇)族と天日矛の両方の系統で、その証拠は、和邇氏の祖(日触使主の父親)「難波根子建振熊」が神功皇后の命により応神天皇の政敵「忍熊王」を討っている。この建振熊は神功皇后の三韓征伐にも従軍し仁徳天皇の時、飛騨国の両面宿禰を退治した人でもあります。あれ？また和邇氏に戻っている！ともかく和邇族と息長族は「継体天皇」の出自に大きく関わっている近江古代豪族なのです😊また仲哀天皇(神功皇后の夫)は倭建命ヤマトタケルの子供であることから、応神天皇は倭建命の孫になります。犬上建部氏なども親族ということです😊倭建命と布多遅ふたじ比売(父は安国造)

の子が「稲依別王」=犬上建部の祖です。安国造は三上祝氏、物部氏と同族でニギハヤヒや天目一箇命を祖にもつ。また別系統で淡海国造がいる。13 成務朝時に彦坐王 3 世孫が淡海国造に任じられたと古事記にある。祖は「天押帶日子命」で、和邇氏、春日氏、小野氏と同系統とある。彦坐王は和邇族、息長族とニギハヤヒの祖とも関係する重要人物です！👉近江には安曇川や安曇の地(アドチ=安土)があるのに「安曇族」が一向に出てこないと思ったら「安曇族」の初期分枝に「和邇族」が分かれている。海人族はいろんな場所、時期も別にして入っていた航海民漁労人です。だから単一には括れないけど、「安曇族」は近江に名前だけ残して信州安曇野や安房、渥美半島、熱海にまで行ったのだろうか!?!? そう言えば「鹿島神宮」は「鹿の島」である。鹿は滋賀で志賀であり「志賀島」(北九州)は「安曇族」の本拠地で「奴国」です。同じく「狗奴国」は邪馬台国とも云われているようです「伊奴一伊都」は糸島です。😊鹿島神が奈良に来て「春日」大社となるけど、この話は後日に改めてさせていただきます。鹿島神宮、鹿取神宮と春日大社と志賀島の関係は、とても興味がある！👉😊奈良だけでなく、これら神社に共通して鹿がいることも納得されるでしょう。🎵なお、息長氏族はスサノオ命の子の五十猛神(太一と称す)イソタケルの後裔の鍛冶氏族でもあります🎵息長氏は宇佐国造の支流出身だろうという説や新羅の天日矛の末裔だという説もあります！また息長足帶姫は卑弥呼だったという考えもあります！スサノオは朱砂=辰砂の王でもある!! またニギハヤヒは天火明命とも天照国照の櫛玉ニギハヤヒ速日とも言い天ノ磐船に乗って十種の神宝を持って、河内に多くの将軍=神、部下(物部もののふ)とともに降りて来た=ニニギ命の兄とも云われています(ニギハヤヒは日本書紀では五十猛神と同一としています)🎵神武以前に近畿を支配していた神です😊近畿にいた神武以前は「三輪」王朝です。その神は大物主神(オオモノヌシ=大いなる物の主)で物とは物部です。蛇体はオロチでもあった!?!?ニニギの孫が神武ですが、周囲の人=神にはワニや海神(ワタツミ)もおられ、海人族との関係が深い人物です😊近畿でヤマトを建国しますが、瀬戸内海は船で行っています。海人族の先導があったことでしょうね!!

古代シリーズの第2段の「息長氏」の補足文です😊東北三社(鹿島神宮、香取神宮、息栖いきす神社)についてです。祭神はそれぞれ武甕槌神、経津主神、天鳥船神です。延喜式(延喜式で神宮は鹿島神宮、香取神宮、伊勢神宮の3つです。)に載っています。経津主神(フツヌシ)は石上神社に物部の「布都御魂」の剣として祀られているから、剣が神格化したものです。天鳥船は船です。武甕槌神が出雲に国譲り(征服)をした際の剣と船です。香取は「舵取り」がなまったものである！問題は平安初期には勧請されていた岩清水八幡宮の縁起「八幡宮御縁起」や「八幡愚童訓」(鎌倉時代成立)には「磯良と申すは筑前鹿の嶋の明神の事也、常陸にては鹿島大明神、大和にては春日大明神、是れ皆一体分身、同体異名にて坐す、同磯良の変化也」「安曇磯良と申す者は志賀海大明神にて、磯良は春日大社に奉祀」「鹿島の明神は、もとはタケミカツチの神也、常州の鹿島の海底に居す、故に磯良と名づく」つまり、志賀海神社と鹿島神宮の祭神は同じだと言っているのである。鹿島神宮と志賀海神社と春日大社に共通するものは「鹿」である。また志賀海神社では磯良の舞としてあるが、春日大社では「細男の舞」として伝わる！元々は和邇氏の本拠地に「春日大社」(名前まで奪い)を創建したのは「藤原氏」である。海人族つながりで、一度は東北三社を巡ってみたいものである！なお、余談だが「伊吹山風土記」が米原の郷土史家が出版されたと新聞に載ってたので購入しました👉「伊吹(息吹く)」と息長氏と製鉄の事も書かれており近江の古代豪族の参考にもなりました!! また日本史も世界史の一部として見ることも勉強になりました!! タケミカツチ(出自も謎の神)は出雲のタケミナカタを諏訪に閉じ込めた!!(同族に裏切られた)結果、今も諏訪大社では

鹿の首を奉納し怨みを忘れないようにしているそうである。夷をもって夷を征すとは朝廷の常套手段である！出雲族の夷を安曇族の夷に征伐させた👉東北三社も東のまつろわぬ者=蝦夷に睨みを利かせているのだろうか？！アテルイの塚もあると聞く！比叡山に酒吞童子も居たという！！唐突だけど、愛智秦氏は秦河勝の子どもだった。という話です！！これも余談ですが、息子の嫁さんの旧姓は「志賀」です。何か因縁めいていませんか？🌪

8、比売神

シリーズの第3段(章)は日牟礼八幡宮の祭神の「比売神」(田心姫神、湍津たぎつ姫神、市杵嶋姫神の三姫神)についてです🎵多紀理毘売命、市寸島比売命、多岐都比売命とも称される海の女神=宗像三女神です。田心姫は別名を奥津島比売命とも言い、市杵嶋姫(狭依毘売)=厳島姫は後世、弁財天と習合して芸能財福の神として有名です。この宗像三女神、八幡宮に祀られています元は世界遺産に登録されている北九州「宗像大社沖つ宮、中つ宮、辺つ宮」にて海人族の宗像(氏)族が祀る神である。ちなみに、綿津見三神は安曇族(阿曇氏)の祖神、住吉三神は安曇族の津守氏が奉祀する神である。これらの神は海人族の航海神で、この三神はオリオン座の三連星を云っているらしい。では宗像三女神が宇佐などの八幡宮に何故祀られているのか？「ウサギとワニ」が再び登場するのである。宗像族系の宇佐族が和邇族安曇族と何らかのトラブルを起こし、オオクニヌシの出雲族が助けた、と思っている。宇佐は神武天皇の東征物語にも出てくる。元は宗像神の宇佐社に応神天皇の八幡神が習合して宇佐八幡宮となっていると見ている。なお、イチキシマ(厳島)姫は弁財天と習合しているが、タギツシマ姫は「瀬織津姫」と同一とも云われる。瀬織津姫は天照大神の妃と伝わるけど、これでは天照大神は男神になってしまいます！？どうりで「斎宮」(天照大神に奉仕する)は未婚女性な訳だ！(権力者が瀬織津姫を隠すのは、そんな理由であろう。ニギハヤヒは天照国照彦天火明櫛玉にぎ速日尊の神である=天あまテル神であり天テラス神ではない！)ところで、市内にも九州宗像の世界遺産に比定された場所をご存じだろうか！？昔は三つの島に見えたのでしょいうね！今の沖島と大島神社のある島町と日牟礼八幡宮のある八幡山(宮内町)です。沖島には奥津島姫と弁財天が大島奥津嶋神社にも宗像神が、そして日牟礼八幡宮の比売神です！琵琶湖の白鬚神社の水中鳥居🌊から沖島を見ると、沖島弁財天と大島奥津嶋神社と日牟礼八幡宮は、一直線になるそうです😊これを「琵琶湖霊的ライン」と呼んでいます！ちなみに私が見つけたのですが、その線を南に延長していくと伊勢神宮や猿田彦神社に突き当たりました。北に延長したら籠ノ神社(元伊勢)に突き当たるかなと思ったけど、少しずれていました！！宗像神と住吉神はアマテラスとスサノオのウケイによって誕生した神であることはご存じの方も多いと思いますので、省略します！🎵

追加部分です😊日牟礼八幡宮のHP(左義長祭)を何気なく見ていたら、祭神「比売神」に宗像三女神の項の追加に「玉依姫」とも云われる。と書いてありました。えっ👁️！？！「玉依姫」と云われる姫は三人います。一人は下鴨神社の祭神で、鴨建角身命の娘で「活玉依姫」(活をつけて区別している)です。賀茂別雷命=上賀茂神社の祭神、の母親です。もう一人は、三輪山の大神主命との物語に出てくる「玉依姫」(箸墓古墳)です。残りの一人は神武天皇の母親=玉依姫で「綿津見豊玉彦神=大綿津見三神の一人」の娘です！姉に「豊玉姫」(八尋和邇の化身)がいます。また玉依姫の兄妹に阿曇氏の祖もいました。神武天皇も海人族ということができるけど！？ここに海神(綿津見、和邇族、阿曇氏)が揃って出ている。なお神武天皇が東征に日向から出て、宇佐の地で宇佐伎族(宗像神)の接待を受けたことはご存じだろうか？あの「素戔とワニ」である。ここにも和邇族との関係がありました！！当然、瀬戸内海を船🚢で吉備から紀州熊野に

行ったのだから海人族に協力してもらっているのだろう。ヤタガラス=鴨氏も出てきます♪尚「玉依姫」が多く出てくるけど、何故かな？とも思ったが玉=霊と考えたら霊が依る姫=巫女で納得です♪案外、卑弥呼も玉依姫であったのでしょうか!!天照大神はオオヒルメ大日巫女で日の巫女ヒミコ卑弥呼であるし、鬼道を司る巫女である!!と云われています。♪邪馬台国は古代のヒコヒメ制を採っています。ヒミコ=ヒメミコ=巫女=霊(魂)依姫です。

シリーズ第4段は「比売神」の続編です。宗像三女神が、アマテラスとスサノオの誓約(ウケイ)により生まれたことはお話しましたが、その時、同時に生まれた五柱の神がいます。合わせて八柱(八王子ともいう)です。彦根市の語源になった「天津彦根命」と「活津彦根命」もいました。八坂神社では、「大年神」をここに入れています。八坂神社の牛頭大王はスサノオですね!しかし「大年神」は大山津見神の娘とスサノオの間にできた子供です。(大山津見神は三島神でもあり野椎神ノツチとの間にイワナガ姫やコノハナサクヤ姫がいます)「大年神」(大神とも云われオオミワとも称された)の子供に「大山昨くい神」がいます。オオヤマクイの神は日枝山にすることが古事記に書かれています。実際に日吉大社の東本宮に別名「山王」権現として祀られている。西本宮には「大物主命神」が鎮座されている。また、「天津彦根命」の子供が天目一箇命=三上山です♪尚「活津彦根命」は、彦根神社(彦根市)と安土の「活津彦根神社」や南津田の「八王子神社」にもおられます。スサノオ命は市内では「上野神社」や御所内の「出雲神社」なんかに祀られている。特にスサノオはヤマタノオロチを退治したが、残党が伊吹山に逃げたので追いかけてきたとも云われる。(オロチから出たアメノムラクモノ剣=草薙剣は鉄製である)伊吹山には大蛇伝説もあり、スサノオが製鉄事業を伝えたとする古い民話(国友鍛冶は有名)もあり、天目一箇命と三上氏や息長氏に符合するのである。スサノオの孫の「大山くいの神」は文字通り、山を喰う神である。山の木を倒し山を掘るのは「製鉄民」(タタラ)であるから。この神は日吉大社と松尾大社に祀られています。松尾大社といえば「秦氏」です😄(秦氏と関係する八幡神も鍛冶の神です)この神は鴨氏の活玉依姫との間で子供をもうけます。すなわち賀茂別雷命=上賀茂神社の祭神である!また蛇といえば、対岸の穴太から白蛇に化身した大物主命神(大己貴命とも云うが、この場合は、八千矛神)が、亀の背中に乗り中主の浜に着き、そこから鹿の背に乗って現在の地に鎮座されたという伝説を持つ「兵主大社」も忘れてはならない!たしか、春日大社の鹿も「鹿島神宮」(鹿の嶋)から春日大明神が鹿に乗ってやって来たと云われている。八千矛神とはオオクニヌシのことである♪また蛇は水の精(海神)であり、鹿とは志賀=安曇族だから😄なんと近江は海人族と縁があるのだろうか(確かに近い淡の海である🌟)!!尚蛇は脱皮を繰り返すので「死と再生」のシンボルであり、害虫のネズミを捕獲する大地の神である。カガともいう。カガシも元は蛇である。一本足は、蛇であるから😄再度、オオクニヌシやニギハヤヒ=天火明命、を読み返しをしているところです😄そして、古事記にある近江の多賀に坐す神も忘れてはならないとは思っている!!イザナギとイザナミですが字からして「ナミ」と「ナギ」は海に関係する神かもしれないでしょう(高アマ=海原も海)!!またスサノオを海を司る神(三貴神)として産まれたとしています🌟そして全国にある「素鷲(ソガ)神社」の祭神はスサノオ命である。素鷲→蘇我=我れ蘇り、という話も興味深いです♪蘇我と出雲が関係しているならば、「蘇民将来」の「蘇民」とは「蘇我の民」とも解釈できる!牛頭大王とはスサノオ神です😄伊吹山には金鷺岳がありますが、息長氏族はスサノオ系統の五十猛神(イタケル、イソタケル。大国主命の兄とされるが、スサノオの子である)の末裔という説もあります♪坂田郡の金太郎の銭まさかりは製鉄民のシンボルでもあります!イソタケルもイザナミ、イザナギも「伊」がついている。紀伊の伊(熊

野も含む)、伊賀、伊勢の「伊」である！こんなことにもこだわりを持って、もう少し調べてみたい！！なお、ヤマタノオロチこそ出雲の元々の王で、スサノオこそ渡来神(海を司る神)であったことは理解してください。櫛の字をもつクシナダヒメの両親のテナヅチとアシナヅチは手足の無いツチの神=ツチノコのツチ=蛇が想像される。スサノオはこの二人に稲田宮主神の名前を与えました。川越氷川神社ではこの二神と併せアラハバキ神=長脛彦が祀られている。長脛彦=オオモノヌシとすれば三輪山の蛇神であり物部とも関係するのでしょうか？✨なおオオクニヌシですが、系図ではスサノオの6世の孫となっていますが、スサノオの娘の須勢理姫命を妻とするのも不思議ですが、スサノオの子には大年神や宇伽之御魂神=倉稲魂神(お稲荷さん)もおられます🎵これらの神はオオクニヌシとどういった関係になるのでしょうか！？数々の試練からスサノオから国を譲り受けたオオクニヌシは、オオモノヌシ？(モノは鬼であり鬼の怪と書いてモノノケである。大物とは大なる鬼の主と読める)とも一緒に国作りをしますが、それをどう考えたら良いのでしょうか！？神武も神話では玉依姫が母になるけど大叔母(豊玉姫は=火遠明命=山幸彦の妻で玉依姫は妹)の関係だけれども？それで良いのでしょうか！？古代史は日本書紀や古事記を知らないとなんのか分からないことがあり脳が混乱するのでちょっとは、予備知識を持って、今回の私の講座に参加してくださいませ👉3月22日の2時頃、研修部会の例会終了後です😊尚、ついでに言えば、古事記の成立が712年、日本書紀が720年で、出雲風土記が733年で、そう成立時期は変わらないけど、古事記と日本書紀には載っているが、出雲風土記には載っていない物語がある。それは因幡の素戔とヤマタノオロチの物語である。つまりこの物語は出雲ではなく、違う地域の物語ということです。余談ですが亀岡市には元出雲とされる出雲大神宮があります❤️つまり私の推論ではウサギは宇佐伎で、豊の国の物語、場面だということです😊では、ヤマタノオロチは、何処の国(出雲風土記には書かれていません)の話なのでしょうか！？そう言えば、出雲郷は三輪山の近くにある。元出雲の出雲大神宮は亀岡市にあることは先に述べた。熊野三山の主神はイザナギとイザナミとスサノオだともいう。フダラの海とも関係があったからだろうか！？熊野については、もう少しお時間をちょうだいしたい😊?(・_・;? 修験道の役小角も「賀茂氏」である。賀茂族については、まだまだ解明すべき謎はこれからです😊「ヤタガラスの娘」の本で勉強します❤️前にも述べましたが、琵琶湖霊ラインでの神の宗像三女神である、沖島の奥津嶋神社(本来は厳島神社)と北津田の大嶋奥津嶋神社と日牟礼八幡宮の比売神はスサノオがウケイにより産んだ神である。奥津宮に坐す奥津嶋比売命は別名を多紀理毘売命と言い、古事記では大国主命と結婚して二神を生んだ👉と書かれている。この話しは、宗像三女神を奉ずる海人系の氏族と出雲系の氏族との通婚や融和が盛んだった証拠である。宇佐はウサギであり、因幡とは幡=秦に因る=素の宇佐となる。宇佐神社は秦氏による創建であることは承知の事実である。また和邇と宇佐の争いが神話になったと解することができる。

9、沙沙貴神社

シリーズ第5段(章)は「沙沙貴神社」についてです👉祭神は「佐佐木大明神」です！？具体的には「少彦名命、大彦命、仁徳天皇、宇多天皇、敦実親王」の四座五柱の総称です。神代に少彦名命が小豆に似た豆のサヤである「ササゲ」の船に乗って当地に降り立ったことからこの地は「ササキ」と呼ばれて「少彦名神」を祀ったことが当社の始まりだという。そして古代に「沙沙貴山君(ササキのヤマのキミ)」が祖の「大彦命=大毘古命」を合わせて祀り社殿を造った。更に平安時代に宇多源氏の源成頼が土着し、孫の佐々木経方が佐々木氏を称するようになった。そして次第に沙沙貴山君の子孫の沙沙貴氏と融合して沙沙貴氏の

氏神だった沙沙貴神社(佐々木宮)に宇多源氏の祖である敦実親王とその父の宇多天皇を新たに合祀したのである!!ん?では、仁徳天皇は?仁徳は「オオサザキ」と云われたことから出ている🌟?とか、(仁徳は応神の子で神功の孫ですね)仁徳の御名代雀部ササキベの山関係の氏族であったからとの説もある。少彦名神は蛾の着物を着て海から現れ出雲の国造りにも登場する有名な神(少名昆古那神スクナビコナともスクナヒコナノミコトともいう=オオナムヂと合体神ともされる)です。酒の神や医療の神ですが、ここでは省略し「大彦命オオビコノミコト」について述べていく。大彦命は欠史八代(2代から9代)と云われる第8代の孝元天皇の子であるが、大彦命を祖とする七族が有名である🌟阿倍臣(大彦命の子の建沼河命を祖)、膳臣(建沼河命の弟を祖)、阿閉臣、伊賀臣、筑紫国造、越国造と今回の「沙沙城山君」である。崇神天皇10の時代に大彦命と和邇臣の祖である彦国葺ヒコクニフクは武埴安彦を討っています。四道將軍の一人である。大彦命の兄(開化)の子に彦坐王(母は和邇氏族のオケツヒメ?)やその周囲に和邇臣の祖や和邇系の子孫に淡海国造=近つ淡海の安の国の造がいることは既にこのシリーズで述べました。さて、沙沙貴氏であるが、日本書紀や古事記には「狭狭城山君」韓袋(衣でなく巾の字)宿彌や倭袋宿彌の名前が見える🌟沙沙貴氏は安倍晴明氏に繋がっていました。第2座の沙沙貴山君(=大彦命)と第4座の宇多天皇、敦実親王の両者の一族どうしの混血が現在の佐々木氏なのです。現在の沙沙貴神社の宮司は岳氏ですが、それは日牟礼八幡宮のところでも述べていますが、岳氏は佐々木源氏の系統です😅三井家や乃木家、伊庭家、朽木家、京極家、六角家などなど220余姓名家の(佐々木氏の)氏神であります!!佐々木氏系図を見ると経方の子の「秀定と行定」のところで流れが二つに分かれている。秀定の子の秀義(鎌倉殿の13人でも有名)系は詳しく、行定系(佐々木宮の神主とある)は簡素です。秀義系佐々木は武家として勢力を保持し、行定系は古代ササキ氏系を包括していったものと思われる🎵海人族系の名前をもつ目賀田氏や伊庭氏などの土着豪族がそれではないかと想像する!!ここで古代近江の海人族=豪族と沙沙貴神社が繋がった!!古代の沙沙貴山君は愛智秦氏とも関わっています!だからキヌガサ山に観音正寺(聖徳太子)が建立されました!!さらに、六角氏の居城があった場所でもあります!!

目賀田氏もそうですが、伊庭氏、九里氏などの六角家家臣には水軍水運に強い氏族がいた。私は、彼らこそ、海人族の末裔で、「本佐々木」=沙沙貴山君の系統ではなかったのか!?!と思っています。

今でこそ、日牟礼八幡宮の宮司は「佐々木源氏」系統の「岳」氏に代わっていますが、その少し前は「目賀田」氏が、その以前は「和邇・和邇」(ワニ一族)の氏族である「櫟(いちい)氏」が宮司でした。櫟氏は和邇の日触使主の分かれである。同族には小野氏や春日氏がいた。

「はちまん、あづち、ふるさとアカデミー」の一スタッフとして勉強会に参加しました。沙沙貴神社では岳宮司と岳禰宜から神社の説明を受け、安土問答の浄厳院でも住職から直接説明を受けることができました。岳宮司が佐々木源氏の系統であるのは分かっていましたが、佐々木定綱からの系統だということが分かって、スッキリした🎵やっぱり気になることは聞いてみるものですね😊系図も購入することができました🎵帰り道に、安土問答で処刑になった法華宗の2人の刑場跡(シガイの森)にも寄って帰りました😊

「はちまん、あづち、ふるさとアカデミー」の総会でした🎵10月に第2回目の検定を行うことや事前勉強会などの計画が決まりました!第2部では「八幡和郎」氏の講演がありました🎵まず「八幡」の自分の氏名から入られて、大概の人=庶民は「氏」ではなく「苗字」であることや「織田」は本流以外の庶流=傍系は「津田」を名乗らせた事や又、織田信長は何故、安土(目賀田山)に城を築いたのか?という理由

の一つにご先祖は近江八幡の津田から出ているため、(例として、徳川の世良田を示して…南津田の人が聞いたら泣いて喜びそうな話=織田家発祥の地が津田郷)とか、秀次は何故に、まだ城として十分機能する安土城を捨て八幡城を築いたのか？(上流からの土砂で大中の湖が浅くなり中洲で船が安土城まで航行することができなくなったので、水運の面から新たに八幡に城と運河を築いたとの理由に思わず納得した)などが興味深く聴けました。さらには、考古学と歴史学と民俗学はトータルで考えてこそ分かることがある。とか、共感することが多くありました

最近、入手した「あづち・はちまん ふるさと検定」の中級・上級編の参考書で、聖徳太子開基のお寺に「比牟礼山 4 ケ寺」と云う記述があった。4 ケ寺もあったとは!?!早速調べてみたら、簡単に分かった!
「比牟礼山願成就寺」「比牟礼山西方寺(仏光寺派八幡別院)」「比牟礼山興隆寺」(多賀町)「比牟礼山東照寺」(多賀町)であった♪興隆寺は日牟礼八幡宮の上社の別当寺(神宮寺)で西方寺は元は阿弥陀寺と伝わる。13 仏講の西方寺以外は天台系であった。八幡祭りに多賀、北之庄(村の移転)が参加する理由が分かったように思います。まだまだ勉強が足りませんでした😅この参考本は本当に必読書です！不足を言えば、安義橋(今昔物語の鬼)や熊沢蕃山の勉学の地(中小森)やシガイの森(浅小井)などが無かったことですが、それらを言ったら、まだまだ枚挙にキリが(限り)なく、枚数も増えてくることでしょう♪不足の箇所は、自分で調べてみましょう!!私も疑問?の箇所が判りました♪(龍神の祠 etc…瑞龍寺を案内する時、龍神の祠が気になっていたのです。比牟礼山 4 ケ寺で、廃寺となった「満願寺」は、「西方寺」(現在仏光寺派八幡別院)と「西願寺」(船木町にある豊臣秀次公が開基という寺)に分かれたのか？どちらも満願寺を前身としている。なお願成就寺には木の中地蔵と共に「満願寺地蔵」がある。これが満願寺の本尊であったと伝えている。つまりもう 1 ケ寺、八幡山にあった比牟礼 4 ケ寺に数えられるのが「満願寺」である。その寺は現在無くて、「宝池山西願寺」(船木町)が豊臣秀次公の祈願所であった。ということと前身が満願寺であった。ということの言い伝えがある。そうすれば、八幡山には 5 ケ寺があったことになるのだけど……

10、邇々藝志神社

大房の「邇々藝志神社」の宮仕を務める NY さんが、当社の祭神は女性だという人がいたため改めて確認したいと言って家に来られました！NY さんも当神社の歴史に詳しい方で色々な資料を集めておられます😄当神社は創祀年代は不詳だが境内に五重石塔があり鎌倉時代のものでされているので、おそらく平安から鎌倉にかけての頃の創建であろう。古くは十禅師権現と称する。日吉七社のうちの十禅師社を分祀したと文書(郷土史会編「近江八幡安土の神社」より)にある。日吉山王七社権現の一つで「瓊瓊杵尊ニギノミコト」を権現としている。その分祀だから当然、「邇々邇々藝志神社」の祭神は「瓊瓊杵尊」です。そこで何処から女性にされたのかを、二人で分析したが、上古の髪形「みづら」を女性と見誤ったのではなかろうか!?!ということになった。また現在の山王七社権現の十禅師は「樹下ジュゲ神社」となっていて、祭神も「鴨玉依姫」としていることから、女性としたのではなかろうか!?!とも話し合った。いずれにせよ「瓊瓊杵尊」は男神です!!「天孫降臨」と称するのは、この瓊瓊杵ニギノ尊のことです!!高皇産靈尊タカミムスメの意向により葦原中津国を治めに日向の高千穂に天降った神様です!!途中で猿田毘古神に先導される。ニギノミコトに従う神は、天児屋命神、布刀玉命神、天宇受売命神、思金神、手力男神などそうそうたるメンバーである。後日談としてニギノミコトは大山津見命の娘のコノハナサクヤヒメを娶り、山幸彦と海幸彦(隼人族)の子を残す。山幸彦こと火遠理命ホホリノミコトは豊玉姫(海神、

八尋鰐)の間でウガヤフキアエズが生まれる。神武の父である。豊玉姫は宇佐豊玉姫として宇佐神社の比売神に祀られている！(ヒミコという説もあります。)なお、ニニギノミコトに天降りさせた神は「高皇産靈尊」神と言い、「高木の神」とも云われます♥「天之御中主神」と共に神話に最初に登場する「造化三神」の一柱です。「天之御中主神」は市内中之庄町に鎮座しています。また「ニニギノミコト」を祀る神社として「円山神社」があります。同じく日吉の十禅師社から分祀されていました✨なお大房村ですが、現在の地域は江戸時代の【天保の絵地図】では「大房村新田」辺りになります。昔に大房村はJ Aカンントリーやエコ村付近にあり大房千軒と称していましたが、疫病により周辺に分散したという伝承があります🎵それは江戸時代の何時の頃かは分からない。大房村は岡山水荃城の合戦に農民弓矢隊として参加したと『琵琶湖の浮城』にも書かれているぐらいだから室町時代にはあったのであろう。また、余談だが、「狭狭貴神社」の「十二座」の神事をご存知だろうか？当町にも苗字が高木氏は何軒もあり「高木座」に参加されています。高木座と高木神！?何か因縁があるかもですねえ！?(町内の高木家の蔵に古文書があるみたいやから調べたいと NY 氏が言っていました。高木氏は佐々木源氏の一族なのか。長田町に高木神社があり、高皇産靈神を奉斎する集団の末裔が高木氏を名乗りこの一帯を領したとされる。高木神の子が少名彦命です。現在の祭神は少名彦命神です。宮大工の高木一族も名を残しています。)また同じくニニギノミコトを祭神として祀る円山神社ですが、この町にも「西川」という苗字が多い(大房町も「西川」が多い)のは偶然であろうか？市内で「西川」と言えば、大房か円山か南津田ぐらいですから🌐ついでにニニギノミコトの父は「正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊」です。どこかで聞いた名前だと思ったら東近江市の太郎坊さんです!!母は高木の神の娘です!!つまりは、祖父に云われて天孫降臨をしたのです。だから「天孫」なのです。天(高天原の天照大神も同じ)であるタカミムスミ(ビ)は「高御産巢日」とも書き【高見・産巢・日】と読み『日高見』国の三文字が入っています🎵「日高見国」は古事記日本書紀が無視した東国の王国です。香取、鹿島の東国三社に繋がります🎵タカミムスミは神話の国譲りに際して、出雲のオオクニヌシのもとにタケミカヅチ(建御雷神)とフツヌシ(経津主神)を派遣した神でした。このことからタカミムスミ(ビ)は東日本を支配していた「日高見国」の統治者というのが、田中英道氏「天孫降臨とは何であったのか」の論(写真)である！(タカミムスミは琉球、奄美大島だとする説もある)最近、関東の古墳群がクローズアップされている。本当に「日高見国」があったのであろうか！?東征時、宇佐の地にて神武の家臣「天種子命」と「宇佐比売命」は娶合うわけだが、「天種子命」の父は「天押雲命(天村雲命)」で、奈良の春日若宮神社の祭神である。春日大明神の4柱とは別に祀られています🎵春日大明神の4柱は何であったか？再度、このタイトルシリーズで述べてありますので、各自でご確認して下さいね！また天村雲尊は海村雲でもあり出雲族がヤマトに建てた国の大王でした！大彦命(狭狭貴神社の祭神の一柱である)も重要な人物みたいです!!最近読んだ本の「魏志和国の都」(伝承の日本史)には、古事記や日本書紀には書かれていない史実と神話の情報があって、読むと参考になりますよ🎵旧事本紀には少名彦と事代主は同じ神で鴨家に繋がるみたいですが、そこらへんは、もう少し調べてみたいと思っています👉この本(魏志和国の都)にはヒコイマス王と和邇の関係まで書かれてあって、記紀には無い神話情報(地域の神社の神)が沢山あって読み物としても面白いです😊

1 1、蒲生野挽歌

どこかで誰かに聞いてこられたのか、詮索はしませんでしたけど、市内在住の「平田修吾」氏(郷土史家)が我が家に突然、訪ねて来られました。沙沙貴山君や市辺押磐皇子のことを熱心に語って、自分の著書だ

と「蒲生野挽歌」を置いて帰られました！私的にも今シリーズで佐々木神社のことを調べたところなのでタイミング的にも良かった！大彦命など、古代近江の話題がよほど私と合ったのでしょうね🎵自説の長話をされました👤そういう話しをする人は少ないのでしょうか(私自身もそう感じるの)🌟気になっていた伊庭氏は本佐々木かどうかを尋ねたら、やっぱり本佐々木系統だとの回答だったので安心しました！また我が家に置いてある甲冑を見てしきりに感激されていました！やっぱり類は友を呼ぶですね。❤️なお、氏の「蒲生野挽歌」を読ませていただいたが、狛の長者の子孫は武士として佐々木氏(本佐々木系かも?)に仕えた。とか、「沖津宮、中津宮、辺津宮」の海の道は琵琶湖にもあった。(これは琵琶湖霊レイラインで説明済み)とか、出雲の国譲りは大国主→神武のことで舞台は大和地方であり、出雲族は元々、大和に居た人々である。(出雲の野見宿禰=土師部は奈良の人)などなど、興味深い話しがいくつもあった。私の推論を後押ししてくれているようでした。本当に平田さんに感謝である🎵なお、この本の発刊によせて、沙沙貴神社第34代宮司岳眞杜氏自身が、自分は佐々木源氏の家系であり、曾祖父の岳梶司氏も第29代宮司で第30代が伊庭貞剛の4男の伊庭慎吉氏であることや、国学者西川吉輔氏の尽力のことなど(若き伊庭貞剛氏や岳梶司氏も師の私塾「修正館=帰正館,？」に学んでいる)が書かれており大変参考になりました。！いずれにせよ、この西川吉輔や観世流「日触詣」を書いた西川貞次郎氏にしろ、八幡商人ながら文化にも貢献した郷土の偉人なのだから👤私達 VG はもう少し彼らのことを学んで屋敷跡などをガイドして回るようにしたいですね😊今のところ新町の近江商人は説明するけれど、国学者西川吉輔屋敷跡などを説明ガイドする人は少ないでしょうね!?!又この二人の家のご先祖(西川傳右衛門=中一、住吉屋=住吉神)は南津田出身ですが、津は港の意味であり、遠い古代には海人族とも関係があったのであろうか？織田信長のご先祖(平親実=平家=厳島神社=宗像三女神)様も津田に匿われていた。とか云うけど🎵そこまでいくと飛躍(想像)しすぎだろうか!!(笑)古代海族は舟を操って烏奴や投馬から淡海まで来たのである。そして近畿に根を張りヤマト政権を形作っていった！というロマンです👤そして、改めて「氏神」は氏族の祖先であったことを学んだ!!と謂うことは、日牟礼八幡宮は和邇氏の氏神神社だったのか!?!本来は地縁による産土神と産子関係だったけど、いつの時代にか、私達も八幡祭の関係で氏子になっていました🎵和邇の氏子だったのか!?!なお、オオモノヌシは「物の怪モノノケ」の王の事だとも云われていた！出雲では主王を「オオナムチ・大名持」と呼んでいるため、一人ではないです😊

12、聖徳太子

今日、雪がちらつく中を白雲館に用事があって行ったら、2階で聖徳太子に関係ある寺社等の紹介をパネルでされていました(1月27日まで)👤そこで感じた事ですが、「三和姫」って誰？と思いました。「蛇神」の「ミワ」で連想するのは三輪山の大神(みわ)神社=大物主神ですね😊そうすると、聖徳太子より古い時代になりますけど😊御澤池の主である「三和姫」(蛇神)は出雲系豪族(近くには雪野山古墳-前方後円墳がある=ニギハヤヒ？物部系と思われる？👤)とみることができる。近くには蛇砂川や白鳥川もあります！白鳥といえばヤマトタケルです！VG 研修部関係で「近江の古代豪族」を調べていると和邇族や安曇族が近江の至るところに関係していた。「三和姫」も案外、その系統なのかと思います👤ヤマトタケルも伊吹の神(息長族?=水に関係あり)に挑み敗れています！なお、物語に登場する「小野」氏は和邇氏と同族です。参考までに!!「小野」妹子繋がり聖徳太子がいてはりました！海人族(航海民)だから遣隋使として派遣されました👤大物主神は大国主命と同一神であるから因幡の兎と「和邇(ワニ)」にも関係したと思います👤でもそうすると、聖徳太子が蘇我馬子に命じて御澤池を掘らせたという伝説の意味に

矛盾を生じますけど!?!日枝の山にも大物主神がいるので、そちらに関係するのかもしれない!?!御澤池の三和姫がニギハヤヒ物部系であれば、納得なのですが(和邇氏系でも OK)😊蘇我馬子というのは疑問符です!一説には聖徳太子と蘇我馬子は同一人物であったという説もありますが、聖徳太子信仰や、これも後世(藤)の創作と言ってしまうばそれまでですが😊

市民大学講座(第1回)を受講してきました!「近江の聖徳太子」ブームの影の仕掛人と云われる大沼芳幸氏の講演(講座)でした。さすがに聖徳太子をよく調べて検証しておられました。八幡山の阿弥陀寺や法華峰(地名)が聖徳太子の縁起に関わっていたことも知ることができ大変参考になりました♪後半 30 分で氏が作られた「聖徳太子絵伝」の説明をされました♪「絵伝」は購入していましたが内容説明は初めて聞かせていただきました!ラッキーでした👍八幡山や長命寺などの聖徳太子伝説、聞けば聴くほど近江と「水神=龍神=蛇神」はやっぱり何か関係がある気がしてきます👉(近江の各地に蛇・龍神伝説があります)蛇、龍とくれば海人族です。近江の海人族といえば安曇族や和邇族ですね(蘇我氏やスサノオ、大国主とも関連性があるかも?)!!長命寺境内の護法権現社で行われている開山会(2/1)=蛇を弓矢で狙う行事も初めて知りました!ひょっとしたら、島町の渡会橋の大蛇伝説も牧町地先の藤ヶ崎神社の龍神さんも聖徳太子伝承と関係があるのかも!?!ナンチャって…と思ってしまうます♪近江の聖徳太子開基伝承は案外こんなもので先に言ったもの勝ちだと先生は言っていましたけど💖今更からでは無理ですか!?!参加者の中には熱心な方もおられて質問されていましたけど!!紫雲山頂法寺「六角堂」は聖徳太子の建立ですが、小野妹子が出家して「専務」と名乗り、池坊の道祖となっていたのには驚きました

六角堂の夢告で聖徳太子が現れて親鸞が法然上人の下に走ったことは有名ですが、その六角堂が聖徳太子の建立で、堂を守るのに小野妹子が出家して「専務」と名乗ったんだということ。池坊の由来にも関係する話ですが、そこに屋敷があった「佐々木六角」氏の名前にも関係することがわかった!

1 3, 織田信長の母・・・土田御前

いまさらなのですが、(信長の出自を調べている中で分かったことですが)織田信長やお市の生母「土田御前」については美濃の土豪「土田政久」の娘とされている。が、(祖父)「政久」の父(祖祖父)は「土田秀久」で美濃の主筋の明智氏や土岐氏に仕えています。また秀久の父「秀定」は元は佐々木六角氏の家臣(一族とも云われる)で「近江守」とも称し、文明年間(1470 年代)に「近江国蒲生郡」(蒲生郡で土田と云えば#土田町しか思いつかない。)から美濃国可児郡に移り住み明応年間に土田城を築いている。いずれにせよ、この時代の土豪の出自は何処までが正しいのか判別が難しいけど、この蒲生郡から美濃に移り住んだ「土田」氏は、元々の出自をたどると木曾義仲の四天王と云われた「根井行親(ねのいゆきちか)」(近江で討死)の末裔で、その子孫が佐々木六角氏に仕えました!!「根井行親」は信濃豪族「滋野」氏の流れを汲み「望月」氏や「海野」氏と同族である。「望月」や「海野」と聞いて👉😊👉ピンときませんか!?!真田十勇士です👍何故、信濃国に「甲賀三郎伝説」があるのか?不思議であった。猿飛佐助が何故甲賀流忍者だったのかも分からなかった!ところが、ここにきて、理解した!現在竜法師にある「甲賀忍術屋敷」は「望月」氏の屋敷です😊望月家の祖の「望月三郎兼家」は「甲賀三郎」とも云われた!!と書いてあった!まさか信長の母「土田御前」から「甲賀三郎」まで(近江に)いくとは?思わなかった♪

1 4, 徐福

「近江の古代豪族」を調べていたら、「徐福」との関係が出てきた。そこで「徐福」関係の図書を取り寄せて調べているけど、いまいちはっきりしない。「徐福伝説」は日本各地に上陸したとあるけれど、難波～熊野地域が有力です、「新宮=秦宮」という人もある。また神武東征時に抵抗した登見(鳥見)の長脛彦は徐福の系統であり、東北に行ってアラハバキとなったとの伝説もある。なぜ「徐福」や「邪馬台国」が『古事記、日本書紀』に載っていないのか!?! そちらこそ疑問です! また秦氏の祖とされる「弓月君」は徐福を追って渡来したのだろうか!?! 「弓月」を逆にすれば「月弓=つきゆみ」=月読となる。月読神社は松尾大社の近くにあり、秦氏のエリア内(嵐山・太秦)にある。神話にも隠された事があるのだろうか!! 徐福と事代主命と五十猛とニギハヤヒは上古代・神話期のキーパーソン(キーマン)のように思える。また、長脛彦をニギハヤヒとする説もあるようです。

15, お城を語ろう

お城を語ろう! 記念講演会が文化会館でありました。「はちまん・あづち、ふるさとアカデミー」のスタッフとして参加しました。中井均先生の講演と関係者のパネルディスカッションでした。観音寺城の石積みは時代的にも古く(当時は土塁が主流の中で石垣技術としては最古であり)他に誇れることや八幡山城の出丸(通常は算木積みなのに丸積みである)に感激したこと、安土城の復元計画の思い、城とは石垣・堀などの土木工事のことで天守閣など建物はさほど重要でない! こと。近世城郭の始まりは安土城なので安土城北側の八角平や虎口方面の遺構保存こそ重要だなどの話でした。確かに江戸時代初期に広島福島家は、台風で壊れた石垣を改修工事して改易になりました! 江戸城も本丸の天守閣は燃えたままでした。それでも江戸城でした。中井先生の話しを聞き、(城の概念は)なるほどと思いました! 今まで安土城復元は=天主閣と思い込んでいました! でも無理して天主閣(安土城)を創る必要もないことの考え方があることを知りました。本物の石垣積みが観音寺城、安土城、八幡山城にある(残っている)ことをむしろ強調した方が良い! とか、城建築資材のリユースの話(短い期間で築城する必要性があったから)又、安土城がまだ使えるのに八幡山に城を築いた理由は安土山を信長の墓にしたかったから、だとか八幡山城は京極高次の時に石垣が積み増しされていることなどを新鮮な情報として聴講できました! この際、石垣がメインの「塞王の盾」を読んで見ることにしよう! なお中井先生の講演レジメが貰った資料に無かったので、責任者に尋ねたところ、9ページもあったので、参加者に無料で500枚印刷配布するのは大変だから、代わりに「水都八都」(観光物産協会)の「近江八幡のお城」版を付けた。ということでした! 納得です😊ご苦勞様です

以前に、このシリーズでも投稿して、近江八幡市内の「お城」(近江八幡観光物産協会のHPで掲載されている)と「大文字屋西川家と山形屋西川家の関係」をお尋ねしましたが、?…有力な情報が得られず……薄識ながら自力で調べた結果、分かったことについて今更ですが揭示します! 「お城」は要約(番号はHPの順)です。(市内点在のお城は随分前の誰かさんの講座の尻拭いですが、研修部ならせめてこのぐらいはその時に説明が欲しかった! という部分です。当然、手元に各城の資料は揃えました。)系図は各種情報・書籍から調べて勝手に私が作成しましたので、誤っているかもしれませんが……(自信はありますが)♪山形屋三代目以降の系図は「西川ふとんの西川甚五郎邸の史料館」で確認してください! 大文字屋さんの系図もwebで調べれば分かります👉……この2点は前々回の私の講座でもって説明したかったのですが、〇〇に時間がない! と云われて省略させられた部分です!! 研修部会以外の会員

Facebook 読者にも一般公開します🎵また、前回の Nk さんの講座「八幡神の源流」も内容的には会員全部が知って欲しいものだったけど、何とか会員全部に公開されることを希望します🎵「ふるさと観光塾」は一般向けだが、会員向けの会員同士の勉強会も有っても良いのでは!!(全体会議の第2部で市内郷土史家等、例えば前に紹介した「蒲生野挽歌」の平田氏等々など……又色んなツテでの郷土史家に限りませんが外部講師を招いての勉強会も良いですね!)注※私の推奨する「蒲生野挽歌」の著者、平田修吾氏はご高齢なので、可能なら早めに希望します🎵

【雑談】先日はボランティアガイドで「朝鮮人街道」を本願寺八幡別院を起点に案内した。旧伴家住宅の通信使饗応料理なども説明しました。ガイドは Nk さんと2人でしたので、終了後雑談で一体、近江八幡で休憩したのは何回なのか?という話になりました。結論から言うと、江戸時代の朝鮮通信使は計12回ですが、第12回目は対馬までで終わりました。残り11回のうち1617年の第2回目は「伏見聘礼」で江戸まで行っていませんでした。また、第1回目1607年の通信使は往路は京都～守山泊ですが能登川伊庭で休憩しています。ですが帰路は近江八幡で休憩していました。第3回からの通信使は往復路を近江八幡(本願寺八幡別院、第6回明暦度通信使から以降の休憩は金台寺と記載があるが、5回以前は昼休は近江八幡とあるが場所は未詳なり。しかし近江八幡で休憩する場所と言えは徳川家康も関ヶ原合戦の帰路に泊まった金台寺しか考えられない。勿論、周辺の寺院や商人の家にも分散)で休憩していました。計算すると江戸までの10往復路のうち19回近江八幡で休憩したのです。また、第8回目の正徳度の通信使の「従事官^{チョンガソ}」の「李南岡=李邦彦(イ・パァンウォン)」が書いた漢詩が本願寺八幡別院に残されており「ユネスコ世界記憶遺産」に登録されていますけど、同じ李邦彦が書いた「日東第一形勝」というのがVG研修旅行で行った^{ハツノ}浦の福禅寺「対潮楼」に残されていてビックリしたのを覚えています🎵(対潮楼には「フルベッキ群像写真」も飾られており驚きました。坂本龍馬といろは丸の関係かと推察する。西○氏が言うように坂本龍馬の活動資金はグラバー氏を通じて英国又はユダヤ資金から出ていたのだろうか?妙に納得する。^{ハツノ}浦では山中鹿之助の首塚とか安国寺の寺とかも見れて歴史好きにはたまりませんでした。ついでにフルベッキはヴォーリズ夫人の一柳満喜子さんの英語の師でもありました。)ちなみに、朝鮮通信使のキッカケを作った義僧と云われる外交僧の「惟政^{ユイセイ}」は1604年に徳川家康と伏見城で「探賊使」(探賊使とは壬辰・丁酉の倭乱時に王の墓を荒らした賊を探しに来たの意)という肩書きで対談しました。松雲大師、四溟堂とも号するが、韓国密陽市の出身であったことから、同じく世界記憶遺産の朝鮮人街道となった関係から、近江八幡市と密陽市は姉妹都市となっています🎵二人とも惟政の表忠寺(密陽市)にも行ったことが分かり雑談に華が咲きました🎵!!お互いにこういった話は大好きです😊

【井筒紋と井桁紋の違い】八幡中学校のフィールドワークのお手伝い(学校支援活動;目的、市街を散策し自分の目と耳で「ふるさとの良さを確かめ考える」)でした。資料館と西川利右衛門邸での事。「大文字屋」さんの屋敷で、何気なく見ている「井筒大」(井に大)の暖簾ですが、「井桁」では?と言っている人!?!の聲が聞こえてきました(笑)(少しフェイク入れてます)。それで他のVG(学校支援の参加者)に聞いてみたら「井桁」と答えた人7割と「井筒」と答えた人は3割でした。郷土資料館にあった屋号のパネルには「井筒大」とありました。結論から謂うと井桁紋、井筒紋はどちらでも良さそうです。紋章辞典では、正方形のものを井筒、菱形のものを井桁と呼ぶ。と書いてありますが、井伊家の「井」や日蓮宗の寺紋「井桁に橘」(正方形の井に橘)を「井桁」という場合もありますので……👍一方、有名な「井桁」(菱形)のマークでは、「住友」(井桁紋)や「三井」(丸の井桁に三)が代表格でしょうか!?!だから菱形の井を井桁とし

たのでしょう…推定ですが!! もう一つ、大文字屋西川利右衛門で有名な「家訓」が「先義後利」ですが、この西川利右衛門家は、子孫が続かなくて絶えますが、その言葉「家訓」は、享保年間に京都伏見で呉服屋を営んだ「大文字屋」(同名異店)に、社是として今もその経営理念は受け継がれています! その会社は「〇に大」とした今の「大丸」百貨店です😊と説明すると、再度、掛軸=家訓を皆さん見られます♪生徒も熱心に書き写していました!

学区の民生児童委員会で連れ合いが登別温泉に行って「第一滝本館」の葉をもらって来てくれました♪登別温泉は同学区に加茂町出身の八幡商人の岡田家(恵比寿屋、松前屋)が場所請負により開拓し、現地支配人の岡田半兵衛さんが硫黄の採掘をしていました。そこに「滝本金蔵」さんが湯宿を創築したのです。それが登別温泉の始まりと云われています! 付け足すと、「岡田半兵衛さんが、硫黄採掘の職人のために温泉場を作り、その後それを滝本夫婦に託した」となっていました。登別温泉のホームページには近江商人の話が一切出ず、滝本夫婦の美談しか載ってないので残念です。

近江八幡に点在するお城 31か所 → 33か所に変更

- 1, 八幡山城: 1585年 羽柴秀次により築城 10年で廃城となる。秀次公高野山で切腹
- 2, 浅小井城: 長享年間(鎌倉時代初頭) 佐々木一門の浅小井長家・元範が築城、信長の侵攻で廃城
- 3, 宇津呂館: 鎌倉時代、京極貞高による築城。貞高が宇津呂氏を名のり代々宇津呂氏代々の居館
- 4, 岡山水莖城: 南北朝時佐々木氏築城、伊庭氏の家老・九里氏が城主、足利義澄・義晴、1525 廃城
- 5, 沖島尾山城: ケンケン山中腹にある。保元平治の乱の源氏の落武者と関連、鎌倉期の築城?
- 6, 沖島頭山城: 南北朝時代、南朝方が越前との中継基地として城を構える。
- 7, 沖島坊谷城: 8代足利義政が水上交通の監視所として築城を命じる。
- 8, 長田城: 築城期不明、佐々木一族の佐々木高信の子・長田胤信から続く一族、代々長田四郎を名のる。
- 9, 小田城(高島館): 築城年代不明、代々高島氏の居館、城主「高島源兵衛」はお鍋の父、信長の側室
- 10, 北津田城: 築城時期・主等不明なれど、観音寺城の支城として丸山城、北之庄城、岡山城と同時期に築城か。永禄年間に六角氏の家臣・和田玄番が入城したとの記録がある。
- 11, 北之庄城: 佐々木六角定頼により築城、時期不明、阿弥陀寺が前身か。別名を岩崎山城という。
- 12, 久郷屋敷(上田): 伊庭氏の被官・久郷氏が築城・年代不明、火薬の職人が住んでいた所。
上田氏館: 佐々木氏の庶流の上田季政を祖とし平安末期から 1595 年まで同地を支配。篠田神社に遺構
- 13, 倉橋部城: 城主の名に「倉橋部右京進」の名が視れる(江源武鑑)が、築城時期は不明。
- 14, 小森城: 伊庭氏の一族の小森氏の築城。年代不明。熊沢蕃山の石碑がある場所が城跡。
- 15, 金剛寺城(慈恩寺): 室町時代中期の佐々木六角氏の本城。六角高頼
- 16, 田中江城: 文明年間、永原氏の築城。同地とは別に、港に近い称念寺周辺に出城が築かれた。
- 17, 谷氏館(友定城): 1487 年谷氏により築城。江戸時代に奥村三郎左衛門が脇本陣として利用。
- 18, 長光寺城: 応仁の乱で六角高頼らの六角氏が居住、元亀年間・柴田勝家が拠った城。
- 19, 西宿城: 中山道にあった平城。築城時期など一切不明。伊庭貞剛邸跡の北側に土塁あり。
- 20, 野村城: 南北朝時代、蒲生氏の一族の野村氏が築城。1485「堀内教氏」の名が
- 21, 船木城: 築城時期不明、南北朝時代には船木氏(佐々木時信)が船木郷を領し船木時信を名乗る。
- 22, 本郷城(九里城): 鎌倉時代より九里村に藤原氏の流れの九里氏が住んで室町期に九里治任が築城。

- 23, 馬淵城：1218年佐々木広綱が馬淵庄を賜り、その弟・広定が馬淵氏の祖となり居館を構えた。
- 24, 牧村城：六角氏の支城。1336年六角時信により築城。水荃内湖の湖上監視のためか。
- 25, 丸山城：六角氏の一族の西条氏が築城。年代不明。子孫に今川家に仕えた松下加兵衛がいる。
- 26, 安土城：目賀田山城を信長が接取する。1576年目賀田山を「安土山」として築城を開始
- 27, 観音寺城：佐々木六角氏の居城。1335年六角氏頼が観音正寺を要塞化したのが始まり。義賢逃走。
- 28, 香庄館：築城期不明、城主に香庄佐渡守頼輔・源左衛門賢輔の名ある。1525年香庄貞信の名あり
- 29, 金剛寺城(金田館)：鎌倉時代から室町時代にかけて六角氏本城。1469年戦火で焼失、安土に移る。
- 30, 木村城：鎌倉時代、佐々木定道が同地を領し一族の木村氏が居住したことに始まる。観音寺城の外港である常楽寺湊を管理する。六角氏衰退後は安土で町奉行を務めた木村次郎左衛門尉。木村高重
- 31, 平井館：佐々木氏の被官・平井氏の居城、築城時期は不明。「平井源八家員」は井上行実の末裔か
- 32, 南津田城：築城時期・築城主とも不明。土豪津田氏の居城、「津田親真」の伝承を持つ。
- 33, 長福寺城：築城室町期、佐々木六角氏の庶流の落合氏の居城であった。江州七手組で観音寺城にも落合屋敷がある

ひでじいの歴史探偵・・・番外編

某投稿にコメントをしてムシが騒いだので、久しぶりに「雑学クイズ」をします！

Q:関白豊臣秀次公に一番近い「木村」氏は次のうち誰か？

- ①木村常陸介重滋(しげこれ)
- ②木村次郎左衛門尉高重
- ③木村伊勢守吉清
- ④木村長門守重成

A：正解は①です。

解説：木村常陸介は、関白豊臣秀次の家老です。秀次事件に連座して切腹しました。②の木村次郎左衛門尉は元は佐々木六角氏の被官でしたが織田信長の家臣になり安土城の普請奉行や安土町奉行を勤めました。安土の木村城の主でもある。③の木村吉清は、明智光秀の家臣から豊臣秀吉の家臣になり太閤検地で認められ、蒲生氏郷と共に奥州支配を命ぜられたが、伊達政宗が裏で糸を引いた葛西大崎の乱・一揆により改易される。この後、豊臣秀次を大将とする奥州仕置軍が組織される。最上義光の娘駒姫と秀次(事件)の話は、この後日談である。間接的きっかけを作ったのは、この木村吉清かもしれない。④の木村重成は①の木村常陸介の子供だけど、一時期、馬淵村に住んだとの伝承あり。母が豊臣秀頼の乳母の宮内卿局だったことから、助命され幼い頃から秀頼の小姓として仕える。大阪夏の陣で討死🥹👉👈以上四人は木村一族です。(写真は関連情報です。)(※過去の他の雑学クイズを見たい方、興味ある方は、「近江八幡一問一答」等々でググって下さい。ZTVのアカウントでです！リンクを張るのは面倒くさいので、各自でして下さい。)

1 6、伊勢編

【ひでじいの歴史探偵……久々の登場です😊】VG協会で伊勢松阪方面に一泊研修(私は都合上不参加)に行かれて、全体会議でその報告があった！松阪ガイドの感想までいいとしても、席上「一口豆知識」として披露されたのは千木の外削ぎ、内削ぎの形から「外宮=豊受大神は男神です」との又々頓珍漢な発言！(前歴あり)まさにDQNと呆れましたよ！豊受大神は誰が何処から見ても女神ですよ😊それが外宮の千木が垂直の外削ぎ(男千木)だから男神だと云われたのには空いた口がふさがらない!!その根拠とするのが「天照大神」=女神(アマテラス)=内宮=内削ぎ(女千木)だから、反対の外削ぎは男神だというのである。伊勢ではその常識はあてにならない。というのが古代史研究の常識であります。伊勢(一泊二日のフィールドワーク)で何を研修してきたのやら(地元ガイドを頼んでたればと思う)。全体会議では大先輩のM氏(神社検定者を自称)やNさんが指摘するものと思っていたけど意外にも誰も異義を言わなかった。そのままでは皆さんはその間違いを正しいと信じてしまう!?!可能性はある。……と心配に思ったので敢えてこの場のFBのVGグループ内で内々につぶやいて誤りを正すこととする。VG皆さんが参拝した猿田彦神社(猿田彦は男神です。)も内削ぎだったけれど、彼言わくこれは例外であるとか？私は考えが逆だと思います。(ここからは自説、会議でこれを話すと長くなるので自粛した。また会議で波風立てるのも大人げないので……………)何が逆なのか？「天照大神」は元は男神であったという説です😊持統天皇と藤原不比等によって男神から女神に(女性天皇の正統性を強調するため古事記・日本書紀が)改ざんされているとのこと🎵だから古代史は面白いのである。❤猿田彦は邇邇芸尊の道案内をしましたが最後は天宇受売に海送りされます(つまり殺された)それまでは猿田彦は伊勢一帯を支配していました！鈴鹿の椿大神社が総本宮で、墳墓があったらしい。更に神武東征の時には猿田彦に替わる神として「ヤタガラス」=鴨氏始祖が案内人になっております。唐突ですが亀岡市の「出雲大神宮(元出雲と云われる)」にも猿田彦(佐田彦)が祀られている。つまり「猿田彦」は出雲族であったという仮説が推論できる。ちなみに天宇受売は和邇氏系の海人族であったらしい🎵海人なら溺れさすことも可能である！続きは次回にします。

【ひでじいの歴史探偵……伊勢神宮編】神社の屋根にある千木、鰹木。一般的には、その形や数で祀られているのが男神か女神が分かるとされるが、伊勢ではそれがあてにならない。女神を祀る神社(=外宮)が男神仕様であったりする。そのことで前回にVG全体会議でのDQNな豆知識の件を投下したのだが、誰かさんのおかげ(横丁?)で、やっぱり複雑な伊勢の迷路=神宮だけに迷宮に足を踏み入れたようです！前回からの続きです。「二見興玉神社」の祭神は猿田彦大神(白鬚と同じ)です🎵相殿神は当然「天宇受売命」だと思っていたが、よく調べたら「宇迦之御魂神」なのです!?!つまり「お稲荷さん」の神さんなのです!?!猿田彦もサルタがサタとなり「佐田彦大神」、天宇受売も「大宮能売大神」として伏見稲荷大社に鎮座(稲荷三座)されている。「宇迦之御魂大神」は稲・穀物の神で保食神(うけもちのかみ)である。これは伊勢外宮の「豊受大神」と同じである。熊野本宮のケツミコ神もウケツ(保食)神である。『また課題?が増えてしまった。』(謎は深まるばかりです😓)なお「伊勢」という地名は、神武東征の時、「伊勢津彦」という神が治めていたけど東へ追いやられたらしい。蘇我と物部の遠因がここにある。「伊勢津彦」は別名が「櫛玉ツタ命」という！「櫛玉」で思い浮かぶのは「天照国照彦火明櫛玉邇芸速日命」いわゆる「天照(アマテル)」です。籠神社の祭神でもある。「伊勢と三輪の神は一体分身(=同体)」「御事今更何と磐座や」(そんなことは今更言うまでもない。)…短絡的に結論を言うと三輪山の神=出雲族の大物主神と伊勢の大神(天照大神ではまだなかった。)は同じなのです！宮中から檜原神社(大神神社の摂社、元伊勢という)

に出された天照大神はその後、齋王と諸国を放浪し伊勢に着いた。当時はまだ伊勢大神に仕える「天照らす日女ヒルメの尊」であった。「皇祖神、天照大神」が体系化するのには天武持統朝である。記紀で皇孫としての天皇・神につながる血統として皇祖神天照大神が発明=創作されたのだ。まつる神からまつられる神への転換は、天皇創造神話に実体を与えるものでした。伊勢神宮もこの時代に整備されたらしい(暫時休憩)♪……下記は伊勢神宮での私の写真ですが、警備の神宮衛士に甲冑に武装して神宮内=内宮に入ることはダメ出しされて、やむなく🏯前で撮ったものです。神宮衛士からは、スサノオが高天原のアマテラスを訪ねた際、スサノオが攻めて来たと勘違いしてアマテラスは男装して対峙したことの故事を出されたのだが、今にして思えば、この話、どうにもひっかかる。(このあと二人は「誓約うけい」を行いスサノオから「正哉吾勝速日天穗耳尊」(天皇家の祖)が生まれる。逆にアマテラスから生まれた市杵島姫など宗像三女神はスサノオの子供になる。難解だけど二人は生まれた子供達=神々を交換する。)[「誓約」の結果、スサノオが勝ち、高天原に入ることを許されているのである！神話ではイザナギ(厩)とイザナミ(波)からスサノオは「海原の支配」を任されている。だから高天原(海原)の正統な後継者ではなかったのか？何故に対峙する必要があったのだろうか？スサノオは出雲の海人族で、伊勢大神(私はニギハヤヒかオオクニヌシもしくは猿田彦：椿大神社が総本宮、と思う)も出雲族なのである♪では皇祖神となった天照大神は何者？=鏡？三種の神器の剣はトツカの剣(鹿島神宮)かアメノムラクモの剣(熱田神宮)のどちらなのか？豊受大神は丹後の羽衣伝説の天女？何故ヤマトタケルは伊勢で倭姫命にスサノオの草薙剣=神器？を渡されたのか？大海人皇子は名前からして海人族、壬申の乱で味方した尾張(オロチの尾を割る=裂く)氏は大海氏の一族で出雲族です。伊勢の謎はまだ深いようです😓今更ですが、伊勢神宮とは皇大神宮と豊受大神宮とそれら摂社等々などの総称ですよ!!伊勢外宮境内には「多賀宮」がある。なぜ皇祖神は天照大神を産んだ両親ではないのか？もうすぐ正月だ！注連縄は蛇が二匹で交尾した姿だとか？鏡餅は蛇の古語「カガ」がとぐろを巻く姿とも云われる。蛇から連想するのは三輪山の太玉主神だ！別名が「倭大国魂神」(崇神期宮中から出された時のもう一方の神)さらに付け加えるなら「大歳神(=年神様)」は出雲スサノオの息子。さらにエビス、大黒、弁天も出雲神❤️……では皆さん、よいお年を！さあ、鏡餅つくるぞうに!!(念のために追記を：猿田彦は出雲では佐太大神・佐田彦神でサタはサ田、サ苗と同じ稲穂の田の意味合い。三千世界の地主神と云われる。ウカノミタマは穀物の神で稲荷神、三狐神、倉稲魂神とも云われ、スサノオの子で、兄に大年神がいる。大宮能売大神オオミヤノメは天皇守護の八神の柱でウカノミタマに仕える女官・巫女の神格化と云われる！だからいずれも稲荷大社なのですね♪食物神には熊野大神櫛御気野命ヅミケノミコもいる。出雲一宮熊野大社の祭神である。熊野といえば和歌山の熊野三山が有名だが別名熊野坐大神、熊野加武呂乃命とも言い、同じ神です。スサノオの息子とも、スサノオの御霊が鎮座するとも云われる。和歌山の熊野本宮にはヤタガラス(賀茂氏の奉祭する神は事代主神)が使っているが神職はニギハヤヒの後裔であった！ニギハヤヒの妻は瀬織津姫=祓戸大神で市杵島姫命とも云われたし、三島大明神=三島溝杭耳神とも云われる。ミヤマヅクイミの神はヤタガラスとも云われます♪ミゾクイといえば比叡のオオヤマクイ神(秦氏の松尾大社にも鎮座)と鴨娘の活玉依姫や、出雲の事代主神も謎の神です。市杵島姫は「アマテル=天火明命=天照御魂神」の妻となった。しかし、籠神社の祭神はアマテルだが相殿神は天照大神なのです!?!このように追記だけでも暗号の解釈は難解ですなあ❤️伊勢神宮の謎も簡単なものではありません。)これらの解決の糸口(糸がおまつり状態)として次回のVG協会一泊研修旅行は「出雲」か「熊野」がいいですね♪コロナが収まればの話ですが♪

【ひでじいの歴史探偵】(伊勢神宮編 2)

前回伊勢神宮の謎を追うのに、何故にそこまで出雲神にこだわるのか？(理由)伊勢と天照大神はこぞって出雲神繋がりであるからです！その理由は未だ謎のままで解明出来ませんが、ヤマト建国に貢献しながら悲劇的な最後を迎えた祟る男神であったようです。日本書紀の言う太陽女神天照大神ではなかったらしい。ヤマト建国直後に「伊勢」に住んでいた「出雲神・伊勢津彦(出雲建子命)」がヤマトの敵に追われて東に向かった、という話が『風土記』に残されている。また崇神朝に天照大神とともに宮中で祀られていた倭大国魂神とは大己貴神であるらしい。さらにヤマトの初代神武天皇は出雲神・事代主神の娘を正妃に迎えている。ヤマト以前には天照大神でない海人の信奉する神=太陽神アマテル？が祀られていたとする有力な説がある。この日神が天武持統期に重ねられ「日神祭祀」から「天神大神祭祀」になるのです。また物部の祖はニギハヤヒ(石上伊弉諾神宮に祀られている。また石上伊弉諾は五十猛神のことを指しニギハヤヒを祀る長脛彦とも云う)であり、蘇我の祖は出雲・スサノオに行きつくのですが、こうした課題を抱えたまま不消化で以上で話を終えようとしたが、年末に読もうと思って購入した『古事記異聞』に伊勢の男千木、女千木が掲載されてあった。(まったく偶然でした！)また猿田彦の正体は天日槍か武内宿禰である程度出雲の祟る神であることが新書小説ではストーリー的にあるので興味深く一気に読んでしまった。それで上記図書(「QED」の著者、私はこの人の本を読んで古代史に興味を持った。私の入門書ですね)の紹介をしておく

稲羽の白兔

明けましておめでとうございます。毎年恒例の干支の解釈です。今年もお付き合いください。どうぞよろしく。

下記は皆さんお馴染みの因幡素兔の物語です。

「気多の前」に来たとき、裸の兔が伏せていた。兔は、八十神に「海塩を浴び、山の頂で、強い風と日光にあたって、

横になっていることだ」と教えられた通りに伏せていたが、海塩が乾くにつれ、体中の皮がことごとく裂けてきて、痛みに苦しんで泣いている。

すると、最後に現れた大穴牟遲神(大国主命)が「なぜ泣いているの」と聞いた。

兔は「私は隠岐の島からこの地に渡ろうと思ったが、渡る手段がありませんでした。そこで、和邇(ワニ)を欺いて、

『私とあなたたち一族とを比べて、どちらが同族が多いか数えよう。できるだけ同族を集めてきて、この島から気多の前まで並んでおくれ。

私がお前たちを踏んで走りながら数えて渡ろう』と誘いました。すると、欺かれてワニは列をなし、私はその上を踏んで数えるふりをしながら渡ってきて、

今にも地に下りようとしたときに、私は『お前たちは欺されたのさ』と言いました。すると最後のワニは、たちまち私を捕えてすっかり毛を剥いでしまいました。それを泣き憂いでいたところ、先に行った八十神たちが

『海で塩水を浴びて、風に当たって伏していなさい』と教えたので、そうしたところ、この身はたちまち傷ついてしまったのです』といった。

そこで、大穴牟遲神が兔に「今すぐ水門へ行き、水で体を洗い、その水門の蒲(がま)の穂をとって敷き散らして、その上を転がって花粉をつければ、

膚はもとのように戻り、必ず癒えるだろう」と教えたので、そうすると、その体は回復した。これが、稲羽の素兎である。

これは神話に仕立ててあるお話なので、表には出せない事柄が記されている例え話です。

実際の兎やワニが主人公ではなく、民族を象徴するお話で、兎は秦氏、ワニは和邇氏を表しています。

因幡素兎を逆から読むと「兎素幡因・兎の素は幡に因む」ということです。

ウサギと秦氏ということは大分の宇佐八幡宮が浮かび上がってきます。もちろん宇佐八幡宮の創建は秦氏です。

宇佐八幡宮のしきたりとして柏手を打つ時には四拍手で出雲大社も四拍手なので、その関係がうかがい知れることではないでしょうか？

またとかく一般論では、どこのお偉い先生が言い出したか分かりませんが「ワニは日本には居ないから鯨のことだ。」という解釈になっています。

これは間違いで、ワニは当然のことながら和邇氏を指すわけです。

秦氏が和邇氏を欺いてひどい目にあわされていた例え話ではないでしょうか。

和邇氏は小野氏と一体で中国系の祭祀民族です。なので滋賀県には和邇と小野があります。

大陸にはワニが居たし、縄文時代には日本にも居たということです。

小野は斧のことだし、和邇氏はもしかしたらワニ革の衣服をきていたのかもしれない。

おっと今日はウサギの話だっけ。

京都の南部に宇治というところには「菟道（とどう）」という地名が残っていますし、ウサギの道というのは後付けにしても、このあたり的大王・菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）は、記紀等に伝わる古代日本の皇族です。

『古事記』『日本書紀』等の多くの史書に記載があり中でも、父応神天皇の寵愛を受けて皇太子に立てられたものの、

異母兄の大鷦鷯尊（おおさざきのみこと：仁徳天皇）に皇位を譲るべく自殺したという美談が知られる。

ただし、これは『日本書紀』にのみ記載された説話です。

この人物の母方は和邇氏であり、後に仁徳天皇が葛城磐ノ姫と婚姻し、履中・反正・允恭天皇と続き、葛城が和邇氏との争いに勝利したことが伺い知れる。

ただ、この京都から宇治に至る、つまり六地蔵・木幡から三室戸、宇治橋に至る地域には200基を超える数の古墳群があり、

なかでも双子塚古墳は取り崩されてはいるものの、仁徳天皇陵古墳と同等の大きさのものであったというので、

秦氏（前方後円墳はすべて秦氏が造った）にも重要な拠点であったことは間違いない。

謎が謎を呼び、まるでウサギの穴に落ちたアリスを体験していただけたような感じなら、2023年最初の私の投稿は成功。今年も幸先が良い。

因幡の素兎の物語には続きがあります。八上媛の求婚を断られた「八十神」は大穴牟遲神を逆恨みして殺そうとします。そこでオオナムジは木の国の大屋毘古神(禍津日神とも五十猛イタケルとも云う)の所に逃げる。イタケルはスサノオの子で「紀伊」の「伊」、伊賀、伊勢の「伊」で信仰された神である。イタケルの子孫は「辛嶋氏」で「大神比義」と共に「宇佐神宮」を建立する！のである。ここにも繋がりががあります！

【因幡の素兎……コメントの続き】前回にコメント欄に書き込みをしたが、改めて投稿することにしました♪宇佐神宮の続きからです！五十猛神の子孫に「辛嶋氏」がおり「大神比義」は名前からして三輪の大神神社(大物主神)の系統ですね。出雲の国譲りでは事代主神と建御名方神が登場する。タケミナカタは「建けき御名の方」という尊称で本当の名前ではない。タケミナカタはタケミカツチという藤原氏の祖神(鹿島神宮=本来は雷神で藤原氏の時で武人神に変化、武人というと「モノノフ」=物部が思い浮かぶ)に諏訪大社に押し込まれる。諏訪大社ではその恨みから鹿の首を供物するという。諏訪地方では「ミシャグジ」様信仰がある。これは飛騨の「両面宿儺」の民間信仰と同じなのか？それは、ともかくとして、「古代史の真実」(FB グループ)に興味深い投稿がありましたので、VG の皆様にもシェアさせていただきます

○一旦、区切りをつけて、ここで中断します。Facebook「近江八幡観光ボランティアガイド協会」グループには続けて投稿をしていきたいと思いますので、続きを読みたい方は、そちらをご覧ください。

(西川秀夫)